

百合石化

作 OPQ

イラスト タクロヲ

4月

新しいクラスに、見知った顔はほとんどいない。徐々にグループの原型が形作られていく中、私は視線を落として俯いていた。

どうしよう。このままだとボッチになる。でも、声をかける勇気が出ない。人と目を合わせるのが苦手だから。ゴーグル越しなら大丈夫だとわかっているけど、体が石になっていくあのおぞましい感覚を忘れることはできない。

「何あれ?」「障害なんだって」

ひそひそ話が心を突く。私のことだ。常に私の両目を覆う大きなプラスチック製のゴーグル。これが人目を惹かなかった試しはない。

誰かが話しかけてきてくれればいいな。そんな都合のいいことばかり考えて、ジッと受け身でいる自分が嫌になる。でも、それぐらい夢見てもいいよね。実際には、誰一人私に近寄ろうとはしないもん。

「ねえねえ、そのゴーグル何?」

私の机に、彫谷さんが腰掛けた。組まれた長い脚はスラッと綺麗で、浮かべた屈託のない笑みは私に上下関係を瞬時に叩き込んできた。

「あ、アタシ彫谷。よろしくね石田～」

いきなり呼び捨て……。誰かに話しかけてほしい、と思っていたのに、私は予想外の来客にテンパった。向こうは私を知らないけれど、私は彼女を知っている。去年違うクラスだったけど、廊下などでイケメンや美人の子たちと一緒に、よく大声でキャピキャピ話していたのを覚えている。

私なんかとは別世界の住人だとばかり思っていたのに、どうしていきなり話しかけてきたんだろう。

いや、カースト上位の人ってみんなこんなノリなのかな……。

「あ……これですか」

すっかり気圧されて萎縮した私は、スマートに返すことができず、そっと自分のゴーグルを触りながら、オウム返ししてしまった。

「『ですか』って！　ウケる～！」

何がどう琴線に触れたのか、私には全くわからない。そこ笑うとこ？　初対面の人に敬語使うのって、そんなにおかしい？

出鼻をくじかれながらも、私は自分の目について説明を始めた。机に座って私を見下ろす彫谷さんの顔が、私を緊張させた。整った睫毛、大きな瞳、鋭い目つき、一点の曇りもない肌、美しくウェーブのかかった茶髪。その全てが私と違う。ああ、声が小さくなっちゃう。別に、同じクラスメイトなのに……。

「よするに一、何なの？」

話の途中で飛び出たその一言で、私は完全に心を折られてしまった。喉がカラッカラだ。

うまく喋れない。

「えっ……と、だから、目を見たら石に……」

しどろもどろになった私を見かねて、去年同じクラスだった神原さんが助け舟を出してくれた。

「石田さんね、誰かと直接目を合わせたら石になっちゃうんだって」

「何それ、こわっ！」

彫谷さんと取り巻きが声を上げて笑った。ああ、違う、違うよ、石になるのは相手じゃなくて……。

「いやいや、石になるのはこっち」

神原さんが私の頭をつかんで言った。一瞬彫谷さんたちがキョトンとすると、また爆笑が起こった。

「うっそマジ〜！？」「アホじゃ〜ん！」

私はいたたまれなくって、この場から逃げ出したかった。クラス中の視線が、今私に集まっている。見ないで。私に目を向けないで。

「んじゃさ、石になるとこ見せてよ」

ギャルの一人が許可もとらずに私のゴーグルに手を伸ばした。

「だ、ダメッ！」

私は反射的にその手を払いのけてしまった。何考えてんの！？

「えー、ケチー」「ちょっとぐらいいーじゃーん」

ギャルたちからのブーイングに、私は戸惑った。え、なんで私が責められてんの？ 悪いのそっちでしょ！？ 石になるのがどれだけ苦しくて大変なのか、何にも知らないくせに。

「それぐらいにしといてやれよ」

イケメン男子の一言で、その場は収束した。それからギャルグループは二度と私に話しかけなかった。

「あんま気にしないで」

「うん……」

神原さんはその後、中堅女子グループに事情を説明してくれた。私が自分でやらないといけないことなのに。情けない。……私が人と目を合わせられなくなってから、どれだけたっただろう。

魔力系を司る神経系に障害が生じたのは、小学校に入ってからだった。交通事故で強く首を打ち、私の体は自身の魔力を制御できなくなってしまった。ある特定のトリガーで、防御魔法が暴発してしまうのだ。トリガーは人と直接目を合わせること。防御魔法は、石化魔法。着ている服や、身に着けているアクセサリー、手に持つ鞆まで、全てが一瞬で石と化す。

魔法の才能を持つ人は、そう多くない。本来は、魔力系の障害なんて、障害には数えられ

ないことが多い。でも不運中の不運で、私には魔法の才能が「あった」。完全な防御魔法を発動させるだけの魔力を有していたのだ。最も、それも今となっては私の足を引っ張る鉄球と鎖でしかない。全身が石化した私は、動くことも喋ることもできないし、当然自力で解除することはできない。誰かに助けてもらうまで、私は完全な石像と化してしまうのだ。ひどく恐ろしい。それに周囲の嘲笑や悪戯が加われば、まさに地獄の責め苦となる。

ただ一点、救いがあるとするならば、ラップ一枚でも暴発は防げる点だろう。しかし眼鏡等ではカバー範囲が狭く、目線が合ってしまう恐れがある。確実に日常生活を安泰にするためには、隙間なく覆うゴーグルが必要不可欠だった。だけど、常日頃から道端でゴーグルをつけている人なんて、現実では滅多にお目にかかれない。であるから、私は事情を知らない人たちに、おかしいファッションの痛いやつだと思われてしまうことが多かった。

そんなわけで、私はすっかり内気な人見知りになってしまった。高校二年生になる今年、自分を変えたいと思った。だけど結局、何も変わらない。こんな障害がなければ、今頃きっと、カースト上位のイケてる女子になれていた……とは思わないけど、今より多くの友達が作れていたに違いない。直接目を合わせて話せる友達が。

5月

朝。私は洗面台で顔を洗い、鏡に映る自分の顔を眺めた。毛先から顔を伝って水滴が滴り落ちる中、うっすらと滲む赤い線が、私の両目を取り囲んでいた。ゴーグルの跡だ。

(ひどい顔……)

三百六十五日、四六時中ゴーグルをつけていれば、そりゃあこんな顔になるよ。お洒落なんて、したことない。眉毛の手入れすらろくにやってない。ゴーグルで潰れるか、見えなくなるかの二択だから。

第一、私のキャラじゃない。私みたいな、地味で垢抜けない、暗くてドモりがちな女じゃね。もっと明るい、美人な子じゃなきゃ、お洒落なんてしたって無駄だ。例えば、彫谷さんみたいな美人じゃないと。流行に明るく、友達が多くて、ファッションに詳しい、裸眼で人と話せる子じゃなきゃ。

その日は雨が降っていた。私は雨が嫌いじゃない。雨合羽の中のゴーグルは、いささか自然に見えるから。

昼前には止んで、太陽がじりじりと学校中を照らした。午後の体育は、生乾きで泥まみれのグラウンドで行われた。

そこで、事件は起こった。サッカーボールが撥ねた泥水が、私の顔にかかってしまった。「うわっ」

最悪。ゴーグルの中まで入ってきたし。外して顔を洗わないといけない。やだなあ……。 「わりー！」「大丈夫？」

蹴った張本人たちがやってきて、軽いノリで謝罪した。別にこんなことで怒ったりしないけど、もうちょっとう……。いいや、別に。

左目を閉じながら、私は手洗い場に向かった。

「大丈夫？ 一緒に……」

「あ、平気平気。だいじょぶだから」

ゴーグルを外さないといけないんだ。近くに人がいると、うっかり目を合わせちゃうかもしれないでしょ。それに、リア充グループのサッカertimeを邪魔したくないし。

あたりを見回し、近くに人がいないことを確認。私はゴーグルを外した。雨上がりの空気が心地いい。学校でゴーグル外すなんて久しぶりかも。

木陰の新鮮な空気を目の周りで味わいながら、適当に顔を洗った。鏡がないから、泥が落ちたかどうかを確かめるには、手で触ってみるしかない。その時だった。

「ほい」

「……っ！？」

私は驚いて飛びのいた。うっかりゴーグルを落としてしまい、両目をつむらなければなら

なかった。

「だだだ誰！？」

「ごめーん。驚かせちゃった？ でもさー、そんな反応されるとちょっとショックなんだけどー」

聞き覚えのある声だ。彫谷さん？ でも何で？

暗闇の中、何をどう話せばいいのかわからず、私は一人まごついていた。

「さっきはゴメンねー、シュウくんドジだから」

なんだ、そんなことで……。それよりゴーグル返してほしい。このままじゃ目を開けられないよ。

「あ、あの、ゴーグル……」

「ほい」

とても硬い、密度の高そうな指先が私の手を掴んだ。だだだ誰！？ 彫谷さんじゃないの！？

「えっ！？ あっ……」

私はパニックになって、思わず目を開いてしまった。ギャル代表の彫谷さんのイメージとは到底結びつかない、力強くてガッシリとした指。他の誰かかと思った。でも違った。私の瞳に映ったのは、間違いなく彫谷さんだった。近……。真正面から目と目があった。整った眉、長い睫毛、澄んだ瞳、きめ細やかな肌……。美人って、まさにこういう人のことを言うんだろうな。

バキッ！

乾いた音が私の体から響いた。一瞬だった。私の毛先から運動靴の先っぽまでが、灰色の冷たい石に変わり、一ミリも動かすことができなくなってしまった。右手を彫谷さんの指とからめたまま。感触からすると、垂れさがったゴーグルもおそらく石になってしまっているだろう。

（あっ……あああ……）

やっちゃった。今年は外で一度もやらかさずにいたのに。クラスメイトの前でただの石ころになっちゃうなんて。

（ご、ごめんなさいっ！）

反射的に、脳内で謝罪した。でも、中身が均質な石材と化した今の私には、喋ることはできない。

怖がらせちゃったかな。どうしよう。

彫谷さんは、ポカンと口を開けたまま、ジッと私を見ていた。ああ、やっぱり。驚かせちゃった。ごめんなさい……。

いたたまれなくて、私はこれ以上彼女と顔を合わせたくなかった。でも、視線も固定されて一切動かさない以上、どうしようもない。

（……あ、あれ……？）

一分。二分。彫谷さんはただ黙って、ずーっと私の顔を見つめ続けていた。何、どうしたの？ ポッチ女子が石ころになったのがそんなに滑稽？

早く離れてくれればいいのに。これ以上私を惨めにしないで。……と思っていたけど、指先の感覚から、理由がわかった。石化の瞬間、思わず彼女の腕を握ってしまっていたらしい。これじゃあ、彼女は石化が解けるまで、私から離れることができない。

(ううっ、最悪……。迷惑までかけてた……)

ただ、彫谷さんはどうにもおかしい様子だった。助けを呼ぼうともせず、だんだん真面目な顔になって、穴が開くかと思うほど、私に強い視線を浴びせかけてきた。顔だけじゃなく、石になった私の指、髪、腰、足……。気がつけば彼女は、屈んで私の脚を熱心に観察し始めた。

(なっ、ななな、何！？)

そんなに物珍しいんだろうか。私が空を眺めていると、脚にまた硬い指の感触が……。

(ひゃんっ！？)

ちょ、どこ触って……。撫でないで、ちょっと！

彫谷さんは私の脚を残された右手で触り、握り、摩り、撫でた。私に意識や感触がないと思っているんだろうか。……全部残っているのに！ むしろ、動けない分いつもより過敏に……ヒャッ！

落ち着いたと思ったら、今度は立ち上がり、顔を近づけてきた。

(待って待って！ ごめんなさいごめんなさい！ よくわかんないけどごめんなさい！ もういいです！)

ようやく、クラスメイトたちがゾロゾロと集まってきた。彫谷さんの……何というかその……「観察」から解放されるのはいいけど、クラスの全員に、一片の細胞も持たない石ころと化した惨めな姿を見られるのは、死にたくなるほど恥ずかしいことだった。単純に石化したのが屈辱だし、加えて外で石になってしまったというのは、即ち私がドジを踏んだということの証明でもあるのだ。

「うわっ、すげー」「俺初一」「俺もー」「マジで石化するんだ」「これどーすりゃいいの？」

「先生呼んだ方がよくなーい？」

ああもうヤダ。やめて。見ないで。見ないでよう……。

生きた人間であれたなら、涙がこぼれていたに違いない。でも、今の私にはそれすら夢物語なのだ。

彫谷さんは私を「観察」するのをやめ、いつもの調子に戻った。

「ていうか、アタシも動けないしいー」

彼女は、石像に掴まれた自らの左腕を強調しながら、嫌みを飛ばした。

「うわほんとだ」「それ痛くなーい？」「巻き込み事故おー」

(すいません……。うう……)

先生の指示で委員が保健室へ向かった後、彫谷さんが呟いた。

「ていうかー、解除魔法しかないわけー？ もっと簡単にパパッと戻せないのぉー？」

神原さんが答えた。

「誰かがキスしても元に戻るって聞いたけど」

そう。解除魔法以外にも、そういう方法もあるっちゃある。でも、みんなが見てる前で私なんかキスしたい人、できる人なんて誰もいないに違いない。第一、私自身絶対嫌だ。好きでも無い人にそんな……。

「えー！ なんだー、そんなことで戻るんだー。はやく言ってよもー」

彫谷さんがケラケラ笑い、即座に顔を私に近づけ……あ、ちょ、うそでしょ、マジで……！？

冷たい石の唇に、生きた柔らかい唇が触れた。石像へのキスは、すぐに生きた女子同士の接吻に変わった。重なった唇を発端に、私の全身に色と生命の脈動が蘇っていく。顔全体が人間に戻り、首から肩へ、お腹へ、そしてやがては足先まで。石化していた指が赤みを帯びて、ピクリと動かした。それを合図に、私は全身を再び動かせるようになった。

「……ッ！！」

私は顔中を真っ赤に染め、すぐに唇を離した。そして、猛烈に後退りして転んだ。

「おおーっ」

冷やかしと感心の混じった歓声が上がる。ギャルグループが「ヒュー！」と口笛を吹いているのが聞こえる。私は予期せぬ突然の事態に、頭がついていかなかった。

ななな何で？ 彫谷さん私にキス……別にする必要なかったのにいやいますぐ私なんぞと離れたかったのって今の家族除いたらファースト……！！

「あはっ、ごめんねー。ビックリした？ でもこの方が早いよね」

彫谷さんは、「別にこのぐらい大したことじゃないでしょ？」と言わんばかりに、友人グループを連れてサッサとグラウンドに戻っていった。

私は生乾きの土の上にベタンと座り込んで、顔を赤くそめたまま、何の言葉も発することができなかった。もう石像じゃないのに。人間にもどったのに……。

「ほら、ちょっと」

神原さんが上を向きながら、私の前に立ちはだかつて、視界を覆った。

(あ……)

私は慌てて、右手に掴んでいたゴーグルを装着した。

キスで復活した場合は、ほんのちょびつとだけ、目を合わせても石にならない。

……キスしちゃった。彫谷さんと……。

心臓がドキドキと大きく唸り始めた。遅いよ……。

そっと唇に手を触れた。まだちょっと余韻が残っている気がする。柔らかかったな……。いい匂いしたし……。

……って、何考えてんの私は！ 変態か！

あー。しばらく彫谷さんとまともに話せないかも……。いや、話す機会ないけど……。

私にとっては大事件でも、グラウンドでサッカーに興じる彫谷さんには、もう私のことなど頭の片隅にも残っていなさそうだった。



6月

昔から、彫刻を見るのが苦手だった。美術の本に載っているミロのヴィーナス。あれが視界に入るたびに、私は鳥肌がたつ。すぐに本を閉じて、自分の両腕が健在であることを、触って確かめなければならなかった。普通の人には、きっとわからない感覚なんだろうな。人を模った彫刻を見るたび、石になった自分の姿を重ね合わせて感情移入してしまう。石になった後、手足が折れてしまった自分。酸性雨で溶けてしまった自分。砕かれて胸から上だけになってしまった自分。そういうものを想像してしまう。小さい頃は胸像を見るたびに吐きかけていたっけ。

流石に今はそれほどではなくなった。皮肉なことに、石化経験が増えるたびに、私は石になった自分の強度に自信を深めさせられたからだ。一言で「石になる」といっても、単純に石に置換されるわけじゃない。あくまでこれは防御魔法。細い指先、細い細い毛先も、ちょっとやそっとの衝撃では折れたりしない。身をもってそれを理解させられたことが、これまでの人生で一度や二度ではなかった。

でも、頭で理解するのと、感覚で理解するのは別だ。今でも、石化中に倒れたりすればこの世の終わりってくらいヒヤッとするし、手足の欠けた彫刻を見るとドキッとする。

だから、この美術室というのはどうにも居心地の悪い空間だった。後ろにズラッと並んだ胸像群。あれは何度見てもダメ。というか見れない。

美術の時間。二人組を作って、互いの顔を描くことになった。やだなあ。あぶれちゃうやつだ……。

神原さんみたいに私とも話してくれるような人は、友達がたくさんいて、こういう時には私と組んでくれない。

それでも頑張って、近くの女子に声をかけた。彼女は親友が休んでいて、今日は一人。狙い目だと思った。

しかし、私は拒否された。「ゴーグルが描きづらい」という思ってもみなかった理由で。気がつきもしなかった。そりゃ、そうかもしれないけれど……。しょうがないじゃん。どうしろっていうの。

続々と二人組が生まれていく中、やはり私は取り残された。偶数だから余らない筈なんだけど。

大体先生も先生だよ。「隣同士」みたいに決めてくれれば、こんな惨めな思いしなくて済むのに。

「石田ひとり～？ アタシいい？」

突然だった。彫谷さんが私に声をかけてきたのだ。私は石になったわけでもないのに、その場で固まり、

「あ、うん……」

と息だか声だかわからない返答を漏らしながら、首を小さく縦に振ることしかできなかった。

恐る恐る彫谷さんの顔を見て、ちょっと描いて、消して、顔を覗いて……。私は正面切って彼女の顔を直視できなかった。先月のキスが頭をよぎるし、何で態々私を選んだのか意味わからな過ぎて怖い。

「あの……何で私と？」

「え～、今聞くソレ～？」

彫谷さんがケラケラ笑った。確かに、描き始めて十分経ってから聞くべきことではなかったかもしれない。

「五月にさあ～、石田っち石になったじゃーん？ そんな時綺麗だな、って思ったからあ、描きたかったの。それだけ」

えっ……！？

私の手が止まった。キレイ？ 私が？ この地味ブス喪女が？ マジですか！？

「いや、そんなことないでしょ絶対。彫谷さんの方が百倍綺麗だよ」

「あはは。でも、ホント綺麗だったよ～。石になってる石田。あこれダジャレだ、あはは」

また想定外の返し。えっ、何。石になった私が綺麗？ そんなの、本当に人生で一度も言われたことないんですけど。からかうのはやめてほしい。

「いや、怖いでしょ……。目の前で人がいきなり石になったら……」

「じゃなくて～、石になった後のあんた。参考になったしいー」

えええっ……。石になった自分なんて、写真でみたこと何回もあるけど、ものすごくおぞましい物体にしか思えなかったけどな。見てたら呪われそうで。そんな力ないけど。

ていうか、今「参考」って言った？ 参考って何？

先月の記憶をまさぐると、石化した後、彫谷さんに下半身をあちこち触られたことを思い出した。あれのこと！？

キスの衝撃で霞んでたけど、よくよく考えたらおかしいよね。セクハラじゃん。気持ちわる……くも……？

彫谷さんと視線が合った。彼女がニヤッと微笑むと、その笑顔の眩しさにノックアウトされてしまった。卑怯だ。美人は。

絵は得意じゃないけど、ド下手ってほどでもない。少々漫画っぽいけど、彫谷さんの顔っぽくはなった絵をイーゼルから外した時。彫谷さんが顔をパアッと輝かせて、こっちへやってきた。

「見せて見せて～。おー、いいじゃん。ありがとね」

私の返答など挟む余地もないままにまくし立て、彼女はさっさと自分の絵を提出して、美術室から出ていった。

(あ……ええと……)

褒め返しそくなった。はあ……。なんでこう、口下手なんだろう。……ていうかそっちは見せてくれないのね。

教卓へ提出に行くと、さっき彼女が出した絵が見えた。

うまい。

私はビックリしてしまった。ギャルのイメージしかなかった、あの彫谷さんが、こんな…
…ものすごくプロっぽい、しっかりとしたデッサンができるなんて、想像したこともなかった。

(え、すごっ、うまっ、ウソ……！？)

思わず見惚れてしまった。私のボサッとした顔が、とても力強い線で描かれている。一番驚いたのは、ゴーストがないこと。それでも、私の素顔を破綻なく完璧に再現できている。ゴースト抜きの私の顔なんて、先月のあの時しか見せたことないのに。記憶力いいのかな。意外……。

「おう、よかったな、綺麗に描いてもらえて」

美術の先生にからかわれたので、私はすぐに自分の稚拙な落書きを置いて、その場を後にした。

彫谷さんって、何なんだろう。ただの頭空っぽ……失礼、ギャル系女子の一人だと思っていたのに。指先だけガチガチで、絵がとっても上手くて、美人で……。いや最後の関係なくない？

それから、何となく彼女を目で追うようになった。あーヤダ。何でこんなに気になるんだろう。

気づかれたら「気持ち悪っ」って思われるよね。ボッチ女子がカースト上位に憧れてるとかやっかんでるとか思われたらヤダなあ。そんなんじゃないのに……。

じゃあ何なんだって言われたら、自分でもよくわかんないけど。

とはいえ、それ以上何かが起こることもなく、何も変わらない日々が過ぎていった。

ただ美術の時間で一回二人組になったってだけで、友達でも何でもないし。グループも違うし。話しかけるなんて死んでも無理だし、やりたくもない。

彫谷さんは、別に私のことなんてこれっぽっちも気にかけてはいないだろう。だから、向こうから話しかけてくることもない。

なのに、何で私は彫谷さんのことを気にしているんだろう。ただイケてる女子に声をかけてもらって舞い上がっちゃったんだろうか。自分がそんな軽薄なタイプだなんて、あんまり考えたくないんだけどな……。

7月

一学期最後の美術の授業が終わった。美術室に行かなくていい、というのは晴れ晴れとした解放感をもたらした。美術の本もさっさとしまっちゃおう。目に入らないところに。

もうすぐ夏休みが来る。とはいえ、ボッチの私には何も予定がない。去年みたいな無味乾燥な夏になるのかな。

十七歳の夏。何かしら思い出を作りたい。でも、どうすればいいのかわからないや。

一学期最後の土日休みに、私は行動を起こした。といっても、夏休みの宿題を始まる前に片付けようってただけだけど……。

美術の先生が出した宿題。絵画のレポート。中学の時から続いてる恒例のやつ。私は美術館がトラウマで、大嫌いだから、いつも最後まで残していた。

だけど、そのせいで毎年「美術の宿題が残っている」という事実が常に私の頭の中に残り、圧迫してきた。

だから今年は、始まる前に終わらせる。そうすれば、きっと心から楽しめる夏休みになる……とは言えないけど、近づけるはず。

美術館では、誰かの特集をやっているらしく、絵だけのコーナーが設けられていた。これは助かった。生の彫刻なんて見たくないし。

企画展示室。人はまばらで、空いていた。日常生活ではまず見ない、大きな絵がいくつも展示されている。その手前には、題名と簡単な解説を添えたプレートがある。パクレそう。一行分にはなるだろうか。

今日初めて名前を聞いた画家の作品群のうち、感想が書きやすそうな作品を探すため、まずは一周して全部見て回ることにした。

順路通りに歩いていると、色づかいが印象的な睡蓮の絵が目飛び込んできた。私はその絵に何となく惹かれた。

もっと近くで見よう。

そう思って歩き出した時、先客の存在に気がついた。睡蓮の絵をジッと眺めている、スラっとした脚に、ウェーブのかかった艶のある茶髪。

ドキッ、と心臓が大きく鼓動した。

彫谷さん。——どうしてここに！？

動揺して足取りがフラつき、踵を返すのが遅れた。

彫谷さんが振り返り、私と目が合った。バレた……。

始めて目にする、私服姿の彫谷さんは、驚くほどに美人だった。彼女の長身と端正な顔に、流行りのファッションが最高にマッチしている。

それに引き換え私はどうだ。芋臭いボサボサ地味ファッション……いや到底ファッショ

ンとは呼べない代物だ。彫谷さんと比べると。

彼女はにこやかに微笑みながら手を振り、こっちへやってきた。流石に、ここから無視して逃げることはできない。

「石田じゃ〜ん。意外一、どしたのー？」

悩んだことなどありません、って感じのキラキラした笑顔と軽妙なノリが、私には眩しかった。どうしても萎縮しちゃう。

「え、っと……。美術の宿題、ほらその……。レポート……」

「あ〜〜！ ってあんた、もう夏休みの宿題始めてんのー？ さっすがー、えら〜い」

彼女はケラケラと笑いながら、私の肩をバンバン叩いた。

彫谷さんはどうなの。なんで美術館なんかにいるの？ 正直、まったくイメージ結びつかないんですけど。

「彫谷さんは……」

「ん？ あ〜アタシ？ アタシはねー、勉強ってゆーかー、参考に？ みたいな？」

べ、勉強？ 彫谷さんが？ いやそれ、レポートじゃなくて？ 宿題関係なく美術の勉強？ え、そんな感じの人……。だっけ！？

「ほらアタシ美術部じゃ〜ん？ モネの絵とか、一度くらいは見とかないとかな〜って。期末終わったら行こうって思ってたー」

私は絶句した。うそ。彫谷さんって美術部だったの！？ ……全然知らなかった。いや接点ないから当然……。でもないか。クラスの女子はみんな知っていたり……。？

「あれ言ったことなかったっけー？ あはは、そんな驚かなくてもいいじゃん」

やば。顔に出てた！？ 挽回しないと……。話題、話題……。

「えっと……。じゃあ、絵とか描くの？」

何聞いてんだ私。当たり前じゃん……。

「うん。絵も描くよー」

も？

彫谷さんが次の絵に移動したので、私も追従した。

いや、なんで私がついてかなくちゃならないんだろう。いいけど別に。

田舎のおうちみたいな絵。積みわら？ というらしい。私は、チラッと隣を盗み見た。絵を眺める彫谷さんの横顔。私には、何とか言う画家の絵よりも、はるかに美しくって、眩いものを感じた。

鼻から顎にかけてのラインが、彫刻のように綺麗だった。耳のピアスもキマッている。もはやここまで来ると、劣等感すら感じない。私なんぞがお隣で、クラスメイトですいません。

ぼーっと彼女に見惚れていると、急に顔を横に向け、また目が合った。

カアッと頬が紅潮して、私は反射的に顔を背けてしまった。絵じゃなくて彫谷さん見てたのバレちゃった。ヤバ気まずい……。

「なに〜？ そんなにアタシ綺麗だった〜？」

彼女は得意気な表情を浮かべて、前かがみになった。うわ顔ちか……。なんかいい匂いするし。これが女子力……。

なんて感心してる場合じゃない。

「は、はい。綺麗だなあって……」

「なに、『はい』って～。ふふっ、ありがとね」

彫谷さんが私に微笑みかけた。また私の顔が赤くなる。なんだろう、この……。

「アタシは石田も美人だと思うんだけどな～、眉整えてえー、髪切ったら……」

自然すぎる流れで私の顔を触ってきたので、ドギマギして目を見開き硬直してしまった。距離感が違う……。どう反応すりゃいいの。ていうか指ゴツイですね……。

「いや、私なんか違うって。美人とかじゃないし……」

「えー、石になってた時、チョー綺麗だったよ」

は、はあ！？ 石化した私が綺麗？ んん？ 前にも言ってたっけ？ もうほんとやめてほしい。嫌味ですか。

「石化してるのが綺麗なわけ、ないでしょ……」

ボソッと声に出してしまった。

「いやホントだってもー。ここのどの彫刻よりもヤバかったもん」

え、あ、そういう話。なんだ、めちゃリアルってことね。そりゃ、リアルさなら作り物よりすごいでしょうよ……。

——そっか。私が綺麗ってわけじゃないんだ。

胸がチクッと痛んだ。理由はわからない。

「アタシもさー、結構彫ってきたけどー、あんなん無理だしさー」

えっ！？

「彫る？ って？」

「あれ言わなかったー？ アタシ彫刻が本業なんだー。彫刻わかるー？ 石ほって作るやつ」

わかりますよそんなことは。しかし意外に意外すぎる。全っ然そんなイメージじゃなかったのに。私の中でギャル日本代表みたいなイメージだった彫谷さん像がガラガラと崩れ去っていく。

その時、彫谷さんのスマホが振動した。あ、マナーモードにしてるんだ。

「あ、じゃあアタシ、そろそろ行くから」

「えっ？ あ、はい」

「だから『はい』って何さー。じゃあまたねー」

彫谷さんは後ろ向きに手を振りながら去っていった。夏服の短い袖から伸びる腕。いかにも女子、って感じの細腕だと、今まで何となくそう思ってた。でも違った。きっと先入観。薄暗い照明が腕の陰影を鮮明に浮かび上がらせた。筋肉質。

(本当に、石、彫ってるんだ……)

私はねじり鉢巻きで一心不乱に彫刻に励む彼女の姿を想像した。普段のイメージとのギャップ、そのミスマッチさが何だか可笑しかったけど、とても尊い光景に思えた。

彫谷さんのことを頭空っぽのギャルだとばかり思っていた自分が、ますます馬鹿で矮小な存在に思えてきて、後ろめたい気持ちで一杯になった。

8月

駅前には浴衣姿の同世代で溢れ返っていた。その全員が私と逆方向に歩いている。

心の中に嫉妬と羨望の念が渦巻いていく。去年までは、自分に嘘をついていた。そういう感情ではないんだと思い込もうとしていた。

けど、今はもうできない。

同じ高校の知り合いが視界に入るたび、見つからないよう下を向きながら、人混みを強引にかき分け避難した。

ゴーグルが目立つから、思いっきり地面を向かなくちゃならないのが辛い。

何で私がこんな惨めな思いをしなきゃならないんだろう。公式が悪い。発売日を一日ズラしてくれればよかったのに。

道の反対側に浴衣姿の神原さんを見つけ、私の心はどんよりと黒く濁った。

こういう時には誘ってくれないんだよね。わかってるけど。別に彼女が悪いなんて思っていない。

彫谷さんはどうしているんだろう。たくさんの友達を引き連れて、花火大会に向かっていくところなんだろうか。

見たかったな。浴衣姿。きっと綺麗なんだろうな……。

……いやいや、どうでもいいでしょ。私には関係ないし。

駅のバス停をバスして、次のバス停にたどり着いたものの、案の定、こっちも人でごった返していた。

あの人混みには、知り合いもいるかもしれない……。そう考えた瞬間、私は横道にそれてしまった。

同級生と鉢合わせしたくないし、紙袋の中身を見られるともっとまずい。

私はバスを使うのをあきらめた。

歩いて帰ろう。帰れない距離じゃない。

人の流れから脱して、商店街の入り口を素通りし、やや寂れた空気が入り交じり始める大通りの終点。

制服姿の高校生が、一つの建物に次々入っていくのを見つけた。

花火大会の日だっていうのに、一体何をしているんだろう。

あの建物、何だっけ。なんか特徴的な外見してるけど。入ったことない。ていうか、今まで存在を知らなかった。

「あれ～？ 石田じゃーん！ 何してんのー？」

まるで予想していなかった不意打ちに、私はみっともなく狼狽えた。

何せ、声の主は、制服姿の彫谷さんだったのだから。

「あ……っと、こんばんは……？」

お友達グループと花火行ってるもんだと思ってた。何してんのこんなところで。ていうか……え？ 制服ってことは、この建物に……用事？

問題の建物と彼女を見比べた私を見て、彫谷さんは心底嬉しそうな笑みを浮かべた。

「あー！ もしかして見に来てくれたーん？」

え、え、何を？

「今日最終日でさー、もうちょいしたら講評だからー、はよせんと終わっちゃうよ」

彫谷さんは返事もきかず、私の左腕をひつつかみ、建物へ向かって歩き出した。

(あっ、あの……ちょっと……)

抗議は声にならなかった。彫谷さんの握力は、男子並みとはいかないんだろうけど、かなり力強かった。

建物の正体はギャラリースペースだった。立て看板によると、今はこの辺の高校が美術展をやっているみたいだ。

彫谷さん美術部だったっけ。てことは作品だしてるの？

見てみたい。彫谷さんって、どんな絵描くんだろう。

あ、いや、彫刻？

中に入ると、違う制服の高校生二人が受付をやっていた。彫谷さんは軽く挨拶しながらパンフレットを一部もらい、私に渡した。

「ほら」

「あ、どうも……」

愛想笑いしたつもりだけど、うまくできただろうか。苦笑いになってませんように。

何かを期待する眼差しで、彫谷さんが私を見ていた。

パンフレットを開いて、尋ねた。これであってますように。

「えーっと、彫谷さんの作品って、どこにあるの？」

「ふふーん」

彫谷さんをご機嫌な様子で私を引っ張った。良かった、合ってた。

「あそこ。立体のとこ」

ホール中央に、いくつかの台が立ち並び、そこに色々な物体が展示されていた。

粘土で作ったオブジェ、彫刻、その他よくわからない何か。

要するに、絵じゃない作品が並んでいた。

「あ、来た来た。彫谷さーん」

同高の美術部員たちがやってきて、私は大層居心地の悪い時間を過ごす羽目になった。

「その子は？」「同クラの石田。見に来てくれたんだってー」「あー、マジー？ 嬉しー、よろしくねー」

「あ、は、はい」

何だか騙しているかのようで、申し訳なかった。彫谷さんとは友達でもないし、交流もな

いし、さりとて美術に興味があるわけでもない。

はい、とかそうですね、みたいなアホな返答を小声で言うだけの拷問みたいな時間を過ごしたあと、

「あ、集まってる集まってる」

「行こ行こ。じゃあ、ゆっくり見てってね」

彫谷さん含む美術部員は私を置いて離れていった。

(どうしろっての……)

一人アウェーに取り残されたまま、私は茫然と立ち尽くした。美術とかハッキリ言ってよくわかんないし。

ていうか、帰っていいのこれ？　ねえ？　わかんないんですけど。

絵のコーナーに、次第に高校生たちが集っている。奥に大人が数人。白髪交じりのおじいさんも。あの中に入って行って

「ごめん、帰っていい？」

なんて言う勇氣は出ない。かといって、このまま黙って帰っても印象悪いよね……。メールもラインもわかんないから、「一言断る」のがとてつもなく難しい。

仕方がないから、あの集まりが一区切りつくまで待ってようか。急ぎの用事もないし……。

やることもないので、私は彫谷さんの作品を探した。プレートに題名、高校名、作者の名前が載っている。この中に……。

あ、あった。

「『脚』彫谷 杏」

これだ。その隣に「優良賞」と書かれた型紙も貼ってある。へー、すごい。

作品は、人間の下半身の彫刻だった。全長は三十センチほど。

中々リアルに彫ってある。これを石の塊から作り上げたのかと思うと、感嘆する。あの彫谷さんが。

これ、写真って撮っていいのかな。美術館はダメだったっけ。

そうこうしていると、ゾロゾロと集団が近づいてきた。

私は別のコーナーを見に行くかのような風を保ちながら、そっと退避した。

集団と入れ替わる形で絵の一角へ身を隠し、絵を眺めているフリをしつつ、集団の話し声に耳を傾けた。

「これは南高の作品ですね、すぐわかりました。自由な～」

先生たちが、出展作品一つ一つになんか色々感想を言って回っているらしい。

褒めることもあれば、けなすこともあった。時には高校全体、若者全体に対し批判めいた言葉も飛び出し、他人事ながらむかつ腹が立った。

(そこまで言う？　あんた何様なのよ)

いやまあ、多分実績ある偉い人ではあるんだろうけどさ。

「……これは『脚』ですね。見た通りですが」

その一言で、急に集中力が高まり、私の脳内が真剣になった。彫谷さんの彫刻のことを言っている。間違いない。

おじいちゃん先生は褒め調子だったので、私はホッとした。よく彫れている、卓抜した技術、上手い……。

いや、何で私がホッとするのさ。別にいいでしょ、けなされたって私には関係ないし……。

そう思った瞬間、論調が一変した。

「しかし……」

から続く言葉は、第三者であるはずの私でさえ、心が辛くなってくるものだった。

この作品には表現がない、見たものをそのまま彫っているだけ、技術が高いだけではダメ、それをどう表現するかに使うことこそが云々かんぬん……。

はあー？ 上手けりゃよくない？ 意地の悪いお爺さんだねー。

陰からそっと身を乗り出してみたけど、ここからじゃ彫谷さんの姿は見えない。集団の最前列にいる（自分の作品だから？）ので、一番遠くだ。

きっと頑張って彫ったんだろうに。何様だよジジイ。

最終的に、技術は認めて優良賞を与えた、教わったことをこなすだけではなく、自己の表現を獲得すれば見違える、彫谷さんには期待している、と言って締めくくった。

（うぜえ……）

私は結局、「講評」とやらが全部終わるまで待ってしまった。集団解散後の彫谷さんは、心なしか、元気がないように見えた。

顔は笑っているけど、あの眩いオーラを感じない。

「あれ、まだいたんだ～」

え、何それ。帰ってよかったの？

「あはは、もしかして講評聞いてたん？」

「うん、まあ……聞こえてたよ」

「どーもダメだねー、アタシ」

相変わらず笑顔は崩さなかったけど、明らかに落ち込み気味なのがある。心が痛い。そんな彫谷さん、見たくないよ……。いつも明るくて、クラスの中心って感じだったのに。

「あの！」

思わず、普段より大きな声が出てしまった。

「？」

彫谷さんが「なーに？」という感じに、優しく首を傾けた。もう引き下がれないから、言っちゃうしかない。

「私はその、彫谷さんの……『脚』、良かったと思うよ」

「ありがとー」

違う。もっとこう……言い方ないの？

言葉に詰まって、立体のコーナーをチラ見した。胸像にオエッ、と生理的嫌悪感を催した瞬間、気がついた。

何で私、下半身の彫刻を見ても気持ち悪くないんだろう。

「んじゃ、アタシら片付けあるから」

「あ、うん……」

もっと言いたいことがあるはずなのに、うまく言語化できない。

それでも、彫谷さんはもう私の方を向いていない。どんどん距離が離れていく。

そもそも私美術部員じゃないし。場違いだ。帰ろう……。

「ねえねえ、石田さんって『ダンシュー』好きなの？」

「えっ！？ あ、はい、でも、何で……」

突然、同学年の美術部員が話しかけてきた。白崎さん……だっけ。同じクラスになったことはないから、今日が事実上初対面だ。何でバレ……あ。

私は右手に携えた紙袋を思い出した。戦利品が顔を覗かせている。

「私も私も～！ 推し誰？ ねえねえ、カプはカプは？ 私土田推しなんだけど～」

周囲の視線が痛い。早くこの場から消えてしまいたい。

「あの、そろそろ帰らないと……」

「ライン教えて～。あとで話そっ」

断るのもおかしいかな……。白崎さんとライン交換した直後、「何サボってんだ」と男子の声が飛び、白崎さんは片付けに戻っていった。

今度こそ帰ろう。その時、入れ替わりに彫谷さんが来た。

「ちょっとちょっとー。アタシにも教えてよー」

えっ。マジで。彫谷さんが……私と！？

「ダメ？」

「あっ、いつ、いえいえ、どうぞはいっ」

帰り道、私はずっとニヤついていたと思う。まずは彫谷さんとライン交換したこと。

無性に嬉しかった。私みたいなやつが、彫谷さんとライン交換できる日が来ようとは。

次に、同じ趣味の友達……かはわからないけど、話せる子ができたこと。推しは違うけど、ハマってるカプは同じだったから、仲良くなれそう。

ちょうどいいタイミングでバスが停まったので、乗り込んだ。

車内は花火帰りの人でパンパンで、中には見知った顔もいた。だけどその日は不思議と気にならなかった。

9月

「お願い！ 放課後美術室来てモデルになって！」

二学期が始まってすぐ。彫谷さんに呼び出された私は、とんでもないお願いをされた。

彫刻のモデルをやってほしい、と頼まれたのだ。

「い、いや、何で私なんか、他にもっと」

「石田じゃないとダメなの！」

私は動転した。あの彫谷さんが……クラストップの女子彫谷さんが、私なんかに頭を下げている。目の前で起きていることが、どうにも信じられなかった。

「十一月の芸術祭、今度は最優秀賞獲りたいの！ ね？ お願い！」

あの嫌な講評を下したおじいさんが脳裏によぎり、心が揺らいだ。

——あのおじいさんをアッと言わせてギャフンとさせる、それはさぞ胸のすく光景だろうと思った。

「で、でも、なんで私みたいなその……地味な……」

「だからあー、石田は……あっ、そうだ！」

彫谷さんが目を輝かせた。

「お返しに、お洒落教えてあげるよ！ いいでしょ？ 決まり！」

「えっ……ええええ！？」

いやいやいや無理無理無理。何言ってんのこの人。私は、自分が彫谷さんみたいに髪を染めてギャル風になっている姿を想像した。絶対似合わない。ひどい絵面になりそう。

「じゃ、放課後よろしくー」

「え、ちょっ……」

彫谷さんは言うだけ言って教室へ走り去った。その足取りは軽く、鼻歌まで口ずさんでいた。どうしよう……引き受けるだなんて一言も……。

ハッキリ断らなかった私も悪いのかな……？

とにかく、無視して帰る、ってわけにもいかない、よね……。たとえ断るにしても、一旦は美術室に顔ださなきゃか……。

ヤダなあ。あの部屋、怖いんだもん……。

美術室の扉。その前でふかーく息を吸って、吐く。よよよよし。入るぞ。

静かに扉を開き、中へお邪魔した。美術部員たちがすでに数人集まっていた。夏の展示会で一応は顔合わせをしているから、アウェー感は軽減されている。白崎さんもいるし……。

だけど、すぐに全身に鳥肌が立ち始めた。悪寒も走る。一瞬、体のあちこちに痛みの錯覚も感じた。教室の後ろにズラリと並んだ胸像。あれは何度見てもダメだ。

大丈夫大丈夫。私の胸から下はちゃんとある。平気……。

「いらっしゃーい！」

白崎さんに招かれて、私は部屋の中心に近づいた。

「あ、あの……私、彫谷さんに……」

「聞ってる聞ってる。モデルやってくれるんでしょ？」

部員たちはイーグルを準備していた。あれ……彫刻のモデルって言ってたような。これってあれじゃない、デッサンのモデル？

ああ、別に私を見ながら彫るわけじゃないのか。一旦絵に描いてから、それを参考にして彫るのかな……？

「お待たせー」

彫谷さんが入ってきた。頼んどいて後から来る？

「ごめん待ったー？ ちょっと待っててー」

彫谷さんは鞆を置いて即、美術準備室へ姿を消した。ああダメだ。断るタイミングを完全に逸した。

もうこうなったら、とにかく早く終わらせて帰ろう。胸像イヤ。

「ええええっ！？」

「あれ、アタシ言ってなかったっけ？」

「聞いてないよ！ ヤダ！ 絶対ヤダ！」

彫谷さんは私にトンデモないことをやらせようと企んでいた。あろうことか、私にこの場で石になってもらい、それをスケッチしたり、観察して参考にしたりして、そして最後は見ながら彫りたいと言い出したのだ。

しかも、すでにある程度彫り始めてある彫刻と、スケッチブックに描かれた彫刻の完成図を私に見せてきた。すなわち、既にポーズまで決まっているのだ。

私に、同じ学校みんなが見ている前で、ポージングして石化しろと言い出したのだ！

さらに悪いことは、彫谷さん以外の美術部員が、これ幸いとデッサン練習をやるということ。どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むの！？

「帰る！ 私帰る！」

「ああー待って！ マジ待って！ マジお願い！」

彫谷さんが扉の前に立ち塞がり、何度も頭を下げてきた。やめてよそれ！ ……卑怯じゃない。美人ってホントにズルい。

「イヤなものはイヤなの！」

「石田さん、何が嫌なわけー？」

白崎さんが参戦してきた。関係ないでしょう！

「いやだって……石になるの辛いし……。美術室怖いし……」

「あれって痛いのか？」

「美術室怖いってなんで？」

「いや、痛くはないけど……。怖いのはええと……」

「じゃ別に良くない？ 簡単に戻れるんでしょ？」

「か、簡単じゃないよ！」

「えー、簡単じゃん。キスするだけでしょ？」

彫谷さんは何でもないことのように答えた。モテる人とは違うんだってば。

「それにアレじゃん。見られたくないし。恥ずかしいしっ」

「そーお？」

白崎さんはじめ、どうも誰もピンとこないようだった。石になったことないからわかんないんだ。

歯がゆかった。みんな一度石になれば、あの辛さ苦しさ惨めさが嫌というほど理解できるだろうに。

「恥ずかしいってどれぐらい？ 教室で水着になるくらい？」

「あ、えっと、うーんと……」

その後、白崎さんは淡々と詰めてきたので、私のイライラは募る一方だった。なんで誰もわかってくれないの！ そんな論理的に解説できるよーなものじゃないの！

それでも、恥ずかしいから男子含む関係のない美術部員たちのデッサンモデルになるのは嫌だと思っている、ということは何とか伝わった。

珍しく悩んでいる風の彫谷さんだったが、いーこと思いついちゃった！ とばかりに、

「だったらウチ来なよ！ ウチでアタシと二人だけでやろ！」

と得意気に提案した。

私は渋ったが、彼女ときたら両手を合わせて片目をつむりながら

「ね、お願い」

などというものだから、その可愛さにクラっときて、うっかり了承……したわけではなかったけど、ハッキリと断り切れず、押し切られてしまった。

彫谷さんの家はかなり大きな戸建てであり、私は萎縮し尻込みした。やっぱり住む世界が違うなあ……。

でも人の家にお呼ばれするのなんて、いつぶりだろう。小学校の低学年が最後だった気がする。

中に入ると、しっかりと掃除が行き届いた清潔な邸宅で、また私は文化レベルの違いを感じ取った。

「とりあえずアタシの部屋行こっか」

私はコクコクと無言で頷き、ヒョコみたいに後をついて行った。家の人は留守みたいだ。共働きなのかな？

彫谷さんの部屋は、想像通りの雰囲気だった。かわいらしい小物やファッション誌が目

付く。それでいて埃もなく整理整頓されていて、私の部屋などとはえらい違いだった。表紙の破れた雑誌が床に落ちていたりはない。

今日私を招いたのはあの場での思い付きだから、準備なんてしていないはず。普段からマメに掃除や整理をしているってことだ。

ダメじゃん私。何一つ勝ってるところがないじゃん……。

「あー、荷物適当に置いといていいから。行こ行こ」

「ど、どこ行くの？」

「あー、外にアタシのアトリエあるから。そこでやろ」

「えええっ!？」

おそらく、元は車庫だったと思われるシャッター付きの小屋。家の中とは打って変わって、絵の具や木の切れ端、真っ白な砂などが床や壁、机を好き放題に汚していた。

床や棚には、これまでに彫谷さんが彫ったであろう彫刻が無造作に置かれている。途中でやめたのか、ただの練習だったのか、明らかに最後まで彫っていないものも多数見受けられる。

年月を感じさせる武骨な木の机には、乾いた絵の具の跡、半端な穴や無数の傷がある。

彫谷さんが照明を点けたが、それでも家の中ほど明るくはならない。薄暗い倉庫の中で、私は次第に後悔に押しつぶされそうになっていた。

(これから、ここで、石になるんだ……)

ブルッと全身が震えた。石になるのは怖い。けどそれ以上に、ここで石になるということは、自分が彫刻の仲間入りをすることであるかのように思えて、いつも以上に恐ろしく感じられた。

準備に夢中になっていた彫谷さんは、生まれたての小鹿のように震えている私に気づき、静かに尋ねた。

「やっぱ、怖かったり？」

「うん、まあ……」

「へーきだって、覚えてる？ アタシ一回キスして戻したことあったっしょ？」

うっ……。ようやく忘れかけていたのに。

「あの時さー、興奮してて気がつかなかったんだけど、もしかしてセクハラだった？」

えっ、今更……。あんだけ人の下半身を撫でまわしておいて。女子同士とはいえ。ていうか興奮って何。興奮するところあった？ 変態なの？

「う、うん、そうだね」

「あはは、ごめんねー。アタシ鈍くってさー」

会話が途切れた。彫谷さんが準備を終え、簡素な丸い木製の椅子に腰かけた時。

「そういやさー、石田って何が怖いの？」

「えっと、だから……」

「石になるのが怖いっていうのはあー、まあわかんなくもないんだけど？ 美術室怖いって言ってなかった？」

あ、ちゃんと聞いてたんだ。今日の会話。

「うん……」

「何で？ よくわかんなくてさ」

「それは……」

自分と重ね合わせてしまうから。

彫谷さんは両手で自分の顔を支えながら、興味深そうに私を見ていた。人に理解してもらえたことあんまりないんだけど……。それでも、彼女が本心から知りたそうに見えたので、私は一生懸命に説明した。自分にできる範囲で。

「あ～そっかあ！ バラバラ死体見ちゃったよーな感じなんだあー！」

伝わった。彫谷さんは合点がいった、という感じに、ウンウン頷いた。それから、両手をパン！ と合わせて

「ごめん！ あれ嫌だったでしょ！？」

と突然謝罪した。私は戸惑った。

「え？ ちょちょっと？ 『あれ』って何！？」

美術室の胸像？ いやあれは彫谷さん正直関係ないっていうか、学校側の話だし。心当たりがないよ。

「夏の美術展！ アタシの彫ったやつ！」

ああ！ 思い出した。あの女性の下半身だけ彫ったやつ。

「いやいや、謝んなくていいよ。あれは別に……」

気持ち悪くなかったよ。……あれ。そうだ、そうだよ。思い出した。嫌じゃなかった。普通に……客観的に見れた気がする。なんでだろう。近くの胸像はダメだったのに。

「あれは……大丈夫だったから」

「えマジ！？ なあ～んだ、よかったあ」

彫谷さんが体から力を抜いた。自分でも不思議。普通に綺麗だな、よく彫れてるなあって思っただけだった気がする。

……「綺麗」だったからだろうか。私はここにきて府に落ちた。嫌悪感よりも先に、綺麗だと思わせてくれたから。きっとそうだ。

「あれは、何というかその、よく彫れてて……気持ち悪い、って思うよりも前に、『綺麗だな』って思えたから……かも……？」

彫谷さんはそれを聞くと、頬を染め、はにかみながら言った。

「ありがと。嬉しい」

私は服を脱いで下着姿になった。恥ずかしいけど、ここまで来ちゃ今更断れない。それに

まあ、女同士だし、彫谷さんしか見てないし。

しかし人の家、それも車庫で服を脱ぐって変な感じ……。妙な背徳感がある。

アトリエの中央に立つと、彫谷さんがポーズを指定した。

「足は広げて。そうこれくらい」

彫谷さんは事細かに注意して、私の脚をつかんでグイグイ動かした。

「ちょっ……大丈夫だから……」

「いやほら、ちゃんとしとかなないと」

「……」

両足を肩幅ほど開いてしっかりと床を踏みしめる。それから彫谷さんは立ち上がり、上半身の指導に移った。

密着して私の腕をつかみ、

「こうやって後ろ回して……えーとほら、鏡見ながら髪を結ってる感じで……」

「わ、わ、わかったから！」

近い近い。彫谷さんの顔が目の前まで接近している。薄暗い照明が彼女の綺麗な顔を照らし出す。ふわっといい匂いがするし、大きな胸も私の小さい胸にあたってくるし、中々平常心というわけにはいかなかった。

背筋をピンとして、両腕を後ろに回す。ポニテを結おうとするような感じで、両手で後ろの髪をつかんで束ねる。顔はやや下向き、視線は上目遣い。

これが彫谷さんの指定だった。こういう彫刻に仕上げる予定らしい。

(恥ずかしい……)

「動かないで動かないでー。……うん、いい」

ジッとポージングしたまま、周りをウロウロする彫谷さんの視線に耐えるのは結構な羞恥プレイだった。

「えっとじゃあ……いいかな？」

彼女が目の前に立った。いよいよ石化する段階かー……。いやこうなるってわかってたんだけど、やっぱり不安が膨れ上がってくるよ。

「……いいよ」

だけど、私はそんなことはおくびにも出さず、オーケーした。

彫谷さんがそっと私の顔に両手を伸ばし、ゴーグルをつかんだ。

胸がドキドキしてくる。今更だけど、友達の家でポージングして石化するなんて、相当の変態行為だね……。

彫谷さんが私の頭からゴーグルを取り外した。私はいつもの癖で両目を強く閉じた。その間に彼女が私の髪をパパッと整え、言った。

「いーよ、開けて」

(あー……ついにか……)

心臓がドクンドクンとさらに強く鼓動する。私はゆっくりと目を開けた。優しく微笑んだ

彫谷さんが、少し前かがみになって立っている。

目と目が合った。

バキッ！

と音をたてて、私の全身が一瞬で石に変わった。着ている下着も含めて。

全身がガチガチに固まり、指一本、髪一本動かない、冷たい石の塊になったことが、全身の感覚から嫌というほど伝わってくる。

ああ……とうとうやっちゃった。

彫谷さんは両目を大きく見開き、まだ目の前に突っ立っていた。やっぱり、目の前で人が石化するのはショッキングな光景だよね……。

と思っていたのだけれど、段々様子がおかしくなってきた。顔は次第に汗まみれになり、全体的に紅潮してきた。

熱でもあるのかな？

静かに両手を伸ばし、私の顔にピタッとあてた。

(な、何？)

それから、顔中を指先で、手のひらで、まさぐられた。鼻、口、目、耳、側頭部、髪、後頭部、束ねた先の髪……。

私はもう恥ずかしくって、今すぐこの場から逃げ出したいくらいだった。しかし、石のままではどうすることもできない。

ただ黙って前を見つめ続けることしか許されない。まったくなされるがままだった。

(ま、まあ……彫刻の参考にする、っていうんだから、しかたない、よね……)

彫谷さんの髪が私の顔にかかった。荒い息遣いが聞こえる。

(ひゃっ)

耳に彼女の息がかかった。動けない分、どうしても敏感になっちゃうから、気をつけてほしいよ……。

失われたはずの心臓が、バクバクと音を鳴らしているような気がした。

頭が終われば首、そして首元、肩、胸……。

胸をつかんで揉まれ……いや、カチカチに固まってるから、一切形を変えないけれど、鼻息の荒い人に両手で乳房を掴まれると、どうしても変な事をされてる気分になってしまう。

(彫谷さん……もうちょっと、その……ええと何ていうか……)

落ち着いた雰囲気、クールにやってほしかった。

次に、彫谷さんは脇を調べ始めた。モミモミしたり、摩ってみたい……。

(ちょ、彫谷さん、そこダメだって、くすぐった……あはっ、はは、やめ、ひゃんっ！)

ああっ、んんっ、だだだダメ、無理無理無理！

今すぐ跳ね上がりたい、体をねじりたい、大笑いしたい……全身に何度も指令が下る。だけど、石像と化している私の体は、ピクリともしないし、動かせない。

身悶えしたい、笑いたい、その欲求が全身を駆け巡るのに、一ミリも体を動かせないのは、耐えがたい焦燥だった。

(ダメダメダメ、そこ弱い無理っ！ 動いてお願い！ あふっ！)

脇周辺が終わっても、行き場のない衝動が燃え尽きるまでしばらく時間を要した。

その間に、彫谷さんは胴体、腰回り、そして股間……。

(ちょちょちょっと、どこ触ってんの！？)

女子同士とはいえ、そんなところをジックリ触られたんじゃ、流石に怒るよ！

……とはいえ、石のままではどうすることもできない。拒否することも、抗議の意を示すことすらできない。まるで人形のように、私は彼女に自分のすべてをゆだね続けなければならなかった。

下半身も、太腿あたりを撫でられている間、またこそばゆくなって、私は苦痛に耐えなければならなかった。いい加減にしてー！

彫谷さんは、足首から下を念入りにチェックした。前回は靴を履いていてお預けだったからだろうか。妙に手つきがいやらしく感じられた。気のせい……だよね？

特に指の間に何度も指先を這わせて、その様子を観察していた。

重心より下を触られると、本能的な恐怖が湧いてくる。

(倒さないでよ～)

地面にひっくり返されても、そうそう折れたりヒビが入ったりはしない。頭ではわかっているけど、やっぱり怖い。

一番怖いのは、受け身がとれないこと。人間っていうのは、体がバランスを崩した時、なんだかんだ言っても筋肉が瞬時に身構えてくれるものだ。

ただ、石化している今は、私はあらゆるレベルにおいて、「受け身」をとることが不可能な状況にある。

要するに、痛みが一切緩和されることなく、ダイレクトに伝わってくるのだ。

(気をつけてよ～)

事前に注意しとけばよかったかな？

そんなことを思いながら、私は薄暗いアトリエの中で、じーっと壁を見つめ続けていた。

どれぐらいの時間がたったかわからない。彫谷さんが私の「観察」をやめてしばらく。

今度はいろんな距離・角度から写真を撮りまくられた。石化しているところを撮られるのって、もののすごく恥ずかしい。

その後はスケッチに移った。今は私の視界にいないし、体を触ってもいない。

こうなってしまうと、彼女が今どこにいるのか、さっぱりわからない。

石化したまま一人でいると、どうしても思考がマイナスに傾いてくる。

このままずーっと放置されたらどうしよう？

石像として売られてしまったら？ 誰にも人間だって気がついてもらえず、一生石のままだったら？

誰かに加工されてしまったら？

彫谷さんは？ どこにいったの？ 早く戻ってきてよ。音はするけど、近くにいてくれないと不安になっちゃう。

彫谷さんがようやく、私の視界に入ってきた。間を置かず私の顔に手を添えて、急接近してきた。

え、あれ、ちょっと……。

唇同士が重なり合った。

彫谷さんの体温が、私の冷たい口に熱を伝えてくる。

まずは口が人の温もりを取り戻した。そこから解凍の波が全身に広がっていく。

頭全体が元に戻っても、彫谷さんはまだキスしたまま離れようとしないう。目をつぶっているからかもしれない。

「も、もういい！ もういいから！」

人間同士のキスになっちゃってるよ！

「あ、そうなの？」

彫谷さんがキスを止め、顔を離してくれた。解除が始まったら、もうキスしていなくてもいいんだよ。……これも言っとけばよかった。

両腕が動かせるようになると、私は自分の唇を指先で撫でた。うー……。女子同士とはいえ……いや女子同士だからこそ、かえって妙な背徳感が……。

「あっ、今の色っぽくない！？」

うるさい！

無事全身元通りになったらすぐ、私はゴーグルを装着し服を着た。あー、死にたくなるほど恥ずかしい……。気まずい。まともに顔見れないし。いたたまれない……。

「やー、時間経つの早くなーい？ 続きは明日ね」

「え？」

今日で終わりじゃないの？

というか、今何時！？

スマホを見ると、既にとんでもない時間になっていた。

(ぎゃー！)

こんな長い時間、石になっていただなんて……。小学校以来では新記録かもしれない。

ていうか、こんなに長い間、クラスメイトに体を弄り回されていたのかと思うと、自分が汚されたかのように思えてきてならなかった。

「ほらほら！ 見る見る？」

彫谷さんは描きかけのスケッチと、一眼レフの写真を私に見せてきた。うわ……。スケッ

チはまだいいとしても、写真はキツかった。

元来、私は自分が好きじゃない。こんな得意気にポーズとって石化してるなんて、私じゃないよー！

ブスが勘違いして調子こいてる感が半端ない。すいませんすいません許してください。
「綺麗だよー……」

え？

彫谷さんは私の写真を眺めながら、どこか恍惚とした表情を浮かべながら呟いた。

ウソでしょ……。どこが？

お世辞ならやめてほしい。私、容姿褒められたことほとんどないんだよ。免疫ないんだよ……。

顔がすーぐ赤くなってくる。もうヤダ。

帰り際、彫谷さんは何度も何度も頭を下げて、お礼を述べた。

あーうん、まあ……いい彫刻できるといいね……。

気まずくってサッサとこの場を離れたかったので、私は適当に生返事して、彫谷邸を後にした。

まだ顔が赤みを帯びている。中々おさまらない。

(なんというかもう……疲れた……)

すっかり日の落ちた夜道を歩きながら、私は今日の体験を反芻していた。

石化して喜ばれたのなんて……初めてかも。

成り行きというか、半強制だったとはいえ、曲がりなりにも自分で石になったのも……初めてかもしれない。

自分の障害が、こんな風に人の役に立つ日が来るなんて、思ってもみなかった。

ゴーグル越しの一番星は、いつもよりちょっぴり明るく輝いて見えた。

翌日。私は放課後早速、彫谷さんに捕まった。

「んじゃ、行こっか」

「うん……」

こうなることは、昨日ラインで予告されていた。とはいえ、「お礼」だから、断るのも忍びない。

私はまた彫谷さんの家にお邪魔した。昨日とは違い、アトリエではなく、人の住む家に。

「ほらジツとして！」

「……はい」

私は眉毛の手入を教わった。人生で初めて、私は軽い化粧もやった。

鏡を見た時、驚いた。地味で垢抜けない喪女の私はそこに映っていなかった。

もちろん、彫谷さんたちほどではない。けど……割と整った顔した、最低限見れる顔がそ

こにはあった。

「ほら～。石田は素材はいいんだよー。いったっしょー？ 美容院行って髪直せば完全体なるよー！」

「あ……う、うん」

言葉もなかった。ちょっと頑張るだけで、こんなに変わるんだ。

今まで、彫谷さんのような人たちのことを心の底で妬んでた。美人に生まれて良かったですなー、ハイハイと。

でも違ったのかもしれない。こうやって、色々工夫して、努力して、みんな美人になったのかな……？

「……ありがとう、彫谷さん」

「いやいや～、昨日滅茶苦茶やらしてもらっちゃったし～。こんくらいは当然っしょ」

彫谷さんは事も無げにそう言って、

「んじゃ、きれーになったところで、昨日の続きやっちゃお！」

とのたまった。

「えっ、でも、もう……」

お礼してもらったし、これで清算なんでは……。

彫谷さんは私の腕をつかんで、キラキラと瞳を輝かせながら、

「ほら早く！ 行こ行こっ！」

と急かした。ちょっ、ズルいってそれ。彫谷さんみたいな美人にそんな可愛くおねだりされたら、スパッと断りづらいじゃーん！

のぼせ上ってた自分がアホでした。彫谷さんの美しさには全然かないませぬ。

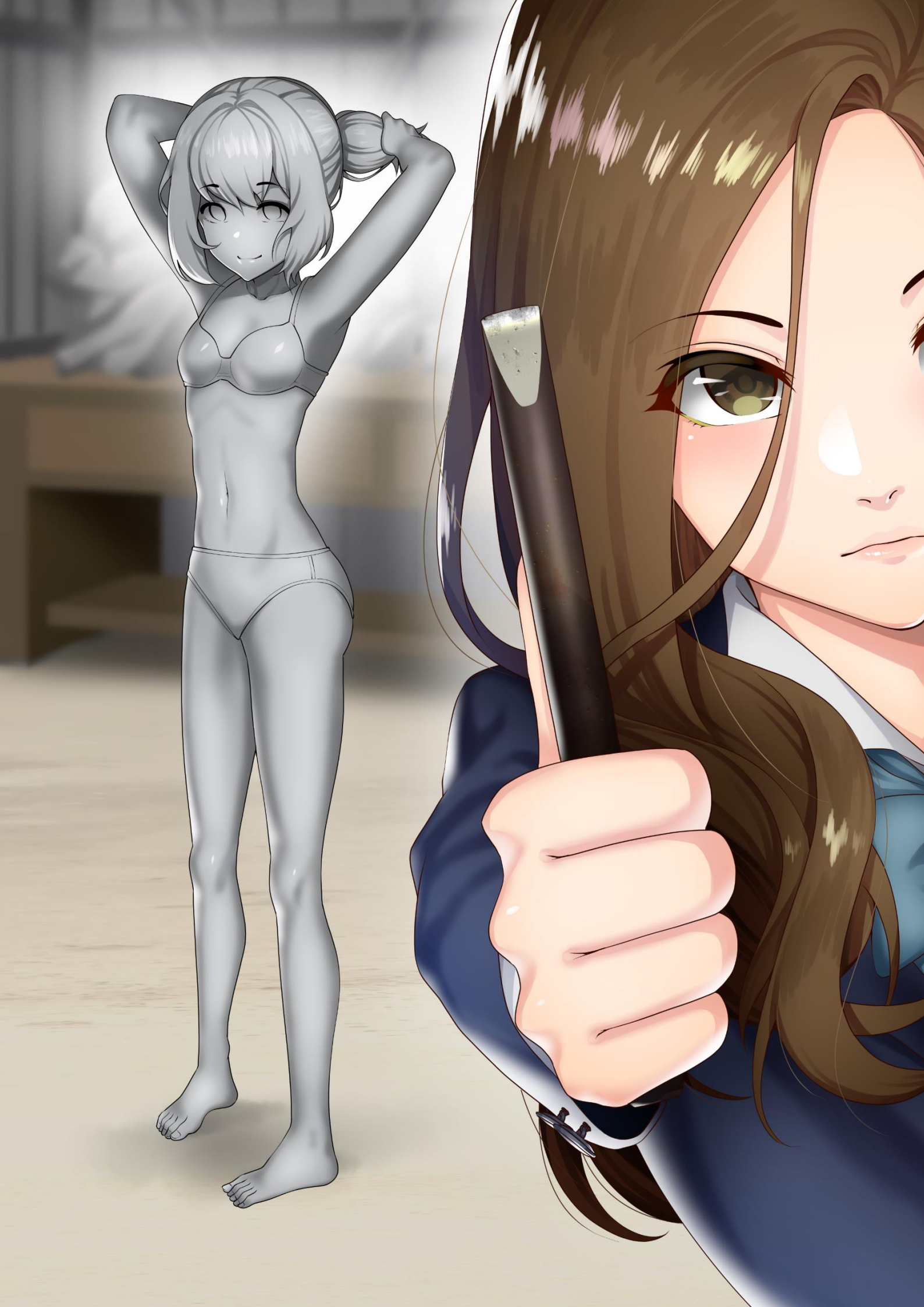
結局、昨日と同じように、アトリエに入り、下着姿で、髪を結う途中のポーズをとって、私は石になった。

それからはズルズルと、放課後彼女の彫刻に付き合う感じになってしまった。勿論毎日休みなしではない。

けど、かなりの高頻度で呼び出されては、彼女のアトリエで石になるのがお決まりみたいになっていった。

「お礼」も増えた。彫谷さんのおススメの美容院に連れていかれたり、休日には一緒に服選びにいたり……。

半ば強制的に、彫谷さんの家族や友人たちとも交流せざるを得なくなり、私の高校生活は様変わりしていった。



10月

「はよーっす」

「あ、おはよう」

進藤くんに挨拶されるようになってから一週間ぐらいかな。彼は彫谷さんのグループとよく話しているイケメンで、これまではずっと違う世界の人間のように感じていた。

私が彼と挨拶をかわすような仲になるだなんて、想像したこともなかった。

彼だけじゃない。気がつけば、私は彫谷さんの交友関係を起点にして、色んな人と軽く会話できるぐらいの立ち位置に浮上していた。

といっても毎回緊張するし、舌は乾くし、視線は逸らしがちだけど。

それでもやっぱり、一学期からは想像もできないぐらい、毎日誰かと話をしている。

去年は誰とも話さない日もあったっけ……。

「おはよ！」

「おはよう……」

彫谷さんに挨拶すると、彼女がニヤリとした。

「なんか明るくなったね～」

毛先の色を変えたことに、彼女はすぐ気づいてくれた。

嬉しいな。

自分の変化に、誰かが気づいてくれる。ちゃんと私を見てくれているんだって、気にかけてくれているんだなって、実感させてくれる。

自分という存在が認められた証のように思えて、心の底から喜びが溢れてくる。

特に、相手が彫谷さんだったなら、尚更だ。

……あいや、別に変に意味はないんだけど……。

アトリエ。今日もまた私は下着姿になって、いつものポーズをとった。

鏡の前で髪を結ってるイメージ。前は言われるがまま、言うとおりに従っていただけだけど、今なら実感を込めたポージングができる。

最近毎日、何度も鏡を見てる。ちょっとした工夫で、自分が綺麗になったり、可愛くなったりするのが楽しい。

これも全部、彫谷さんのおかげだ。彼女が切欠をくれなかったら、今もぼっちのまま、劣等感にまみれて世の中を呪う毎日を暮らしていたに違いない。

恩返しをしたい。

といっても、彫谷さんはとっくに美人で、明るくて、友達もたくさんいて、お金持ちで…。

私から与えられる物なんて、何一つない。

だからこそ、私にできる唯一の方法で彼女を喜ばせてあげたい。

彼女のモデルにふさわしい、美しい石像になることで。

……自分が「美しい」だなんて言うのは思い上がりが過ぎるけど。でも、最近はやっぴり自信もついてきたよ。少しずつだけど。

「いいよ」

「ほーい」

彫谷さんが私の前に立ち、ゴーグルを外した。髪を簡単に整える間、私は目をつむる。

「オーケー。……開けて」

瞼を上げると、互いの瞳が直線状に並んだ。

パキン。

という乾いた音をたて、私は石化した。

コーン、コツーン、バキッ、という彫刻の音も、ずいぶん耳になじむようになった。

彫谷さんが私を見ながら石を彫っている。もう大分それっぽい形になってきている。

不思議な感覚だった。石化した私の分身とも呼べる存在が、彼女の手によって少しずつ形作られているのをこの目で見るのは。

石化中、私は動くことも喋ることもできない。だから、彫谷さんが一方的に何か話している時以外は、アトリエは静寂に包まれるのが常だった。

「石田さー、すごい可愛くなったよね」

「……」

「だからずーっと言ってたじゃん？ 石田はモトはいいんだって」

「……」

ただの突起と化した石の唇は、絶対に開くことはない。彫谷さんの言葉に相槌すら打てないのがもどかしい。

会話がしたい、そう考えるようになるだなんて、ホント自分にビックリだ。

「今朝もねー、見た瞬間ときめいちゃったもん。かわいっ！ って」

うわわ、やば。動けたら顔がだらしくニヤケまくってたかも……。

「あ、でもこれじゃわかんないね。ゼーんぶ同じ灰色だし」

彫谷さんが立ち上がり、私の石化した毛先をチョン、とつついた。それから、人差し指と中指で挟み、そっと撫でた。

「……」

「見た目は同じでもさ、なんとなく違って感じるよね」

また座り込んで彫りはじめながら、彫谷さんが「ひとり言」を続けた。

「こう石になっててもさ、初めとは全然違うのよ。ポーズも体型も同じでも……なんかこう、力強いっていうか、自信を感じるっていうか……」

「……」

「夏にさ、土田先生が、アタシの彫刻は表現がないって言ってたけど……。最近、自分でも

何となくわかるような気がして」

「……」

「なんだろうね。アタシもさ、そういうの……これで表現できたらな、って思うんだ」

「……」

「……あーごめん。こんなこと聞かされても困るよね。何言ってんのかなアタシ」

「……」

「まーよーするにさ、石田のおかげで、アタシの最高傑作になりそうな気がするから……。ホント、付き合ってくれてありがとね。」

(……どういたしまして)

少しは私も彫谷さんに何かを与えられたのかな。

そう思うと、心が軽くなる。私は初めて、彫谷さんと対等な関係になれた気がした。

全身が生氣を取り戻し、私と彫谷さんはそっと唇同士を離した。寝起きの心臓が一際力強く鼓動している。

彫谷さんとのキスは何度やっても慣れることがない。私は毎回顔中、耳まで赤くしてしまう。

当初はケロリとしていた彫谷さんも、何だか次第に様子が怪しくなってきた。最近じゃ、私ほどではないにせよ、頬を染めて、無言で静かに、しおらしく私を見つめてくるのだからたまらない。

「あのっ……また石になっちゃうから……」

「あっ、そうだね、ゴメン！」

彫谷さんは慌てて、私の背中に回していた両腕を離し、アトリエの隅っこへ移動した。

(抱き着く必要……ある……?)

ゴーグルを装着し、服を着ながら、互いに気まずい時間を過ごした。

回を重ねるごとに、妙な雰囲気になってきてる気がする……。

彫谷さんも、もっと最初みたいに毅然とした態度でいてくれればいいのに。

まさか、私がお洒落に目覚めて見違えるほど可愛くなったから……なーんてことはないよね。ない。

考えすぎ考えすぎ。

そもそも、恋人同士でもないクラスメイト同士でほぼ毎日キスするなんてのが異常だし、気にするなって方が無理なんだ、うん。

っていやいやいや！ 前提おかしいって前提！ 女の子同士なんだから恋人とか……ないし……。絶対……。

11月

彫谷さんの彫刻は、素人目にはほとんど完成しているかのように見えた。

私は、まず「すごい」と思った。とてもリアルだ。まるで私が魔法で縮んだみたい。

次に、迸るエネルギーを感じた。あまり動きのないポージングなのに、全体に力が感じられ、澆刺として見える。

最後に、恥ずかしくなった。彫刻の私は、下着をつけておらず、全裸だったからだ。

あと、本物の私よりもスタイルが引き締まっているように見えるのは気のせい？

正面から見た顔も、なんか美人に補正されてるような……。

もしかして、私は彫谷さんにはこう見えてるとか？

いやいやいや！　ないないない！

「どう？」

「すごいよ！　すごい綺麗！」

小学生みたいな感想しか言えない自分が情けなかったけど、実際そう感じたんだからいいよね？

「こんな美人に彫ってもらって、すごい嬉しい。ありがとう」

彫谷さんは少し顔を曇らせた。あれ？

「ご、ごめん、何か気にさわ……」

「ああいや、そうじゃないの」

「？」

彫谷さんは屈んで、自分の最新作を静かに観察した。次に私の方を見ると、悔しそうに顔をしかめた。

「ほ、彫谷さん……？」

「あのさ、石化してくれる？」

「え、あ……いいけど」

彫刻の拡大版と相成った私と、本物の彫刻を並べて、彫谷さんは唸りながら二者を見比べていた。

私の視界からは見えないけど、あの彫刻と隣同士になって並べられている……と考えると、妙にこそばゆく、奇妙な感覚に襲われた。

彫谷さんは頭を抱え、うなり、掻きむしった。彫谷さんが取り乱すのは珍しい。

(もしかして、私に負けてる、から……？)

彼女の苦痛の原因が自分にあるのかもしれない。そう思うと、いてもたってもいられなくなり、心の中で叫んだ。

(彫谷さん！　私は彫刻じゃないよ！　だからいいんだよ！)

私は本物の人間が石化したものなんだから、そりゃーリアルさで勝負するなら、彫刻側が

負けるに決まってる。そんなの、競争するようなところじゃないはずだよ。

彫谷さんはあっちこっちウロウロしたり、私に顔を近づけて、熱心に観察したりを繰り返した。そして、自身の作品を見て、ため息をついた。

（も、元に戻して！ そんな彫谷さん見たくないよ！）

私が石になったのは、それが彼女を喜ばせてあげられるからなのに……。彫谷さんが苦しむんなら、石になんてなりたくない！

それから十数分後、彫谷さんのキスで私は復活した。心なしか、いつもより浅くて、心のこもっていないキスであるように感じた。

……いや、別に普段も心がこもってなんかないけど！

私はゴーグルだけ装着し、服を着るのも忘れて彫谷さんに声をかけた。

「ねえ……。私は……」

「ごめん。石田悪くないから。アタシがまだ……下手っぴだからさ」

彫谷さんは悲し気な目で彫刻を見た。よく彫れてると思うんだけどなあ。

「リアルさは勝負してないの。初めから」

彫谷さんが続けた。

「アタシはこれでさ……自分なりに表現がしたくって、石田にモデル頼んだの」

五月に見た、石化した私に、彫刻作品として見惚れてしまったのだと、彫谷さんは吐露した。息をのむ精緻な造形はもちろん、それ以上に「生きている」ことに感動した。彫谷さんはあの日私を見てから、ずっと忘れられなくなったのだという。その衝撃を「脚」にぶつけた。リアルには彫れた。でも、生きさせることはできなかった。完璧に、理想通りとはいかなくても、今回はその入り口には立ちたかった。でもまだそこに到達できていない気がする……。

「ごめんね。アタシの勝手な自己満足につき合わせちゃって」

彫谷さんは赤裸々に自らの心情苦悩を私に打ち明けた。

私も衝撃だった。五月の時から、そんな風に見てもらえていたなんて……。いや、彫刻扱いは怒るべきところだ。でもそんなことはどうでもよかった。私は、あの頃は、自分は彫谷さんにとっては空気みたいな存在なんだって、ずっとそう思っていた。

「彫谷さん！」

自分でもビックリするぐらい、大きな声が出た。彫谷さんもちょっとビクッとした。私は両手で彼女の肩をつかんで、言った。

「私も……ずっと前、そのころから、彫谷さんのこと、美人だな、友達多くていいなって思ってた……憧れてて……。だから、彫谷さんと仲良くなれて、すっごく嬉しかったし……。それに、今までずっと、自分の障害、大っ嫌いだったけど……。彫谷さんの役に立てて、前よりもっと、嫌い度薄れてきて、ありがとうっていうか……。あ、あとあと、お洒落とかファッションとか教えてくれて、友達増やしてくれて、ホントに、すっごい嬉しかった！ だ

からええと……彫谷さんはすごいよ！ 自信持っていていいし、彫谷さんの勝手な自己満足じゃなくって、私も楽しかったから！」

彫谷さんはポカーンとしていたが、次第に笑顔になり、一人で大笑いした。

私は急に冷静になり、死にたくなるほど恥ずかしくなってきた。何言ってんの私。一人で勝手に熱くなって、めちゃくちゃ喋り倒して……。

ヤバい。穴が合ったら埋まりたいぐらい恥ずかしい。やっちゃった。やらかした……。ドン引きされるやつ……。

彫谷さんは笑いながら、私の手を優しく払いのけ、お返しとばかりに私の背中をバシバシ叩いた。

「あはは！ あっはは！ ありがと！ 元気出た！」

痛っ。加減してよ彫谷さん……。

「うし！ やりますか！」

でもまあ、よかった。立ち直ったみたい。

「じゃ、石になってー」

えっ、また？ さっき石化したばかりなのに。

あーけど、あの可愛らしいワクワク顔には逆らえない。

私はそれから期限ギリギリまで、彼女の仕上げに付き合い続けた。

彫谷さんの新作「目ざめ」は完成……かはわからないけど、見違えるほどすごい作品になった。

(そうそう、こんな気持ちだったな、私)

二か月ほど前の私が、そこにいた。お洒落に、自分の可能性に気づき始めて、ワクワクとドキドキ、そしてちょっぴりの照れと不安が入り交じった、あの頃の自分。

ほんのちょっと前なのに、無性に遠い日のことのように感じる。

彫谷さんが魂を込めて彫り上げた彫刻からは、「この子」の感情がアリアリと読み取れた。

これが展示されちゃうのかー……。

やっぱり、恥ずかしいな。自分が石化して展示されるみたいで。

今までは彫刻を見ると、「最悪の末路を辿った自分」に思えて吐いていた。でもこれは違う。真逆の彫刻だ。

丁寧に梱包する彫谷さんを眺めながら、私は感傷に浸った。薄暗い車庫のアトリエ。私と彫谷さん二人だけの空間。もうここに来るのも終わり……なんだよね。

寂しいな。もっと二人で色々話したかったな。遊びに行きたかったな。

いや、この作品ができたからと言って、別に私と彫谷さんは友達ではなくなるわけでは……。友達……。友達なのかな。なれたのかな。

「賞、とれるといいね」

「うん。とるよ。ずーっとつきあわせちゃったもんね。本当にありがとう」

彫谷さんは少し照れくさそうに笑った。それから、
「お礼しないとだね。どこ行く？ 何食べたい？」
と尋ねてきた。私は嬉しくって、内心小躍りしていた。
彫刻が完成したからって、私と彫谷さんの仲は終わらない。これからも続いていくんだ。

12月

彫谷さんの「目ざめ」は無事、最優秀賞に選ばれた。

私は彫谷さんと一緒に会場に行き、手を取り合って喜んだ。私も誇らしく感じたのを覚えている。

まあ、裸で石化した私が展示されてるようなもんだから、恥ずかしくって一度しか見に行かなかったけど。

だから講評は聞いていないし、彫谷さんにも尋ねなかった。自分の分身ともいえる彫刻の評なんて、すごく気になるけど、やっぱり恥ずかしすぎて無理。

彫谷さんは来年の夏、県代表としてこの作品を総文祭へ出品することになった。

総文祭というのは、彼女によると、文化部のインターハイみたいなものらしい。そんなものがあるだなんて、私はちっとも知らなかった。

彫谷さんは、高校生活の間に一回出たかった、と熱っぽく語り、その嬉しそうな顔を見ると、私まで心が弾んでくる。

「石田のおかげだねー。ありがと」

「いや、私は別に……。彫ったのは彫谷さんだし、彫谷さんの実力だよ」

とはいえ、私の裸体が全国の舞台で晒されるのか……と思うと、ちょっぴり複雑な気分になる。

ある日、私は彫谷さんの家に招かれ、二人で話をしたり、ゲームしたり、一緒に本を読んだりして楽しく遊んでいた。

私はおふざけでゴーグルを外し、石化してみせた。着ている服も一緒に石になり、私の体と一体化した。

今、私の体と服は一つだ。同じ石から彫りだしたような状態になっている。

彫谷さんはテンションを上げ、興奮しながら裾や皺を観察し、指でなぞり、鼻息荒くセクハラを繰り返した。

流石に私も焦った。というかビビった。なんでそこまで熱狂するの……。

あ、でも、服を着て石化するのって、五月以来かも。アトリエではずっと下着姿で固まっていたっけ。

キスして復帰した後、彫谷さんが尋ねた。

「ねえ、石田ってさ、服とかアクセとか一緒に石になってたけどさ、どこまで石になんの？」

あれ、言ったことなかったっけ？

「それはほら……自分の身に着けている物……まで、かな」

これは身を守る「防御魔法」が暴発している症状だから、「自分」のテリトリーに入るものはまとめて石化する。病院の先生はそう説明していた。

だから、接着していたとしても、床とか壁とかは石化しない。

……椅子は場合によりけりかな。学校含む、「外」にいるときは腰掛けてる物が石になることはないけど、自分の部屋の椅子は石化したような気がする。

彫谷さんは終始、興味深そうに聞いていた。それから、私の手を握って言った。

「こうしてたらさ、アタシも石になるの？」

ドキッとした。あんまり聞かれたくなかったやつだ。彼女はグイッと顔を近づけ、私の顔を澄まして見つめた。やっぱり綺麗だな。いや今それはどうでもいいって。

「んーと、えっと……病院の先生曰く、『仲間』なら一緒に石化する、って……」

防御魔法の範囲は「仲間」にも有効だ。誰かと体のどこかを密着していた場合、その人物と一緒に石になるかどうか。それは私との関係性によって決まる。

過去、家族は何回か巻き込んでしまったことがある。あと、小学校低学年の時。友達も…

…。嫌な汗が背中を流れた。

私と一緒に石化した子は、次の日から私を無視し、ハブるようになる。当たり前だよ。あんな怖い、辛い目に巻き込んだじゃったら。

私がうまく友達を作れなくなった原因の一つだ。

「へーマジ！？　すごいじゃん！」

「えっ！？」

意外な返答が帰ってきた。私は改めて彫谷さんの能天気さに救われつつ呆れた。

「いやいやいや！　怖いでしょ普通！？　一緒に石になっちゃうんだよ！？」

「え～でも面白そう！」

彫谷さんは両手で私の右手をギュッと握りしめた。

「やろうよ！　アタシ、石なってみたい！」

「えええええっ！？」

いやでも、二人とも石になっちゃったらどうするの？　誰が戻すの？

「あ、そっか。二人とも石になっちゃったら戻れないよね」

気がついたらしい。助かっ……。

「ママ～」

彫谷さんはそう呼びかけながら、部屋の外へ出ていった。

結局、やってみる流れになってしまった。彫谷さんに手を掴まれて「お願いっ」されたら、断るのは難しい。

ベッドに腰掛けながら、胸に不安が渦巻いた。

(もし、彫谷さんが石にならなかったらどうしよう？)

あれは五月だっけ。手をつないでいた彼女は石にならなかった。私が「仲間」だと思っていなかった証だ。

もし、今これから実験して、前と同じようになってしまったら？

私は彫谷さんと仲良くなれた、って思ってる。友達になれたんだ、って……。でも、もしも、心の奥底で……。

万一、私だけが石化したら？ 彫谷さんは怒るかな。ショック……だよね。嫌われるかも。怖い。

やりたくない。

悪寒が押し寄せてくる。

彫谷さんが隣に座った。ゼロ距離で、太腿をピッタリと密着させてくる。

「あーもしかして、一学期石にならなかったじゃん、とか思ってる？」

「えっ……」

覚えてたんだ。どうしよう。私は彫谷さん友達だと思ってるのに。私は彫谷さんを好きなのに。

「あの時は全然話したこともなかったもんね～！ あはは、懐かし～」

彫谷さんはケラケラ笑い、私の両手を強く握った。

「大丈夫！ 今はアタシら友達でしょ！」

「……うん」

「まあ別にアタシが石にならなくっても、別に友達じゃないんだとか思わないからさ。そんなビビんないでよ～」

「ご、ごめんね。だよね」

手の震えがおさまった。彫谷さんが離してくれたので、そのまま顔のゴーグルをつかみ、そっと外した。

ゴーグルをベッドに捨て、両手を胸の前に持ってきた。目をつむっているのに、彫谷さんが見えない。密着した太腿の感触、柔和な匂いと存在感だけ。

彫谷さんの手が私の手をつかんだ。手のひら同士を張り付け、そっと指をからめる。

両手が彼女と繋がった。固いけど、柔らかい。

「い……いい？」

「いつでもいいよ」

「ホントに？」

「ホントに」

心臓が高鳴る。ゆっくりと目を開いた。優しく微笑んだ彫谷さんの顔を、私はゴーグルなしで直視した。

私の視線が澄んだ瞳を捉えた瞬間。

バキバキッ！

という岩が二重に砕けるような音とともに、私と彼女は一つになった。

彫谷さんには何もかもが衝撃だろうけど、私も驚く経験をする事になった。目の前で人が石化するのを、初めて目にしたのだ。

自分が石になる様子を、自分でみることはできない。映像では見たことある。だけど、いざ実際に目の前で彫谷さんが一瞬で冷たい石の塊になってしまったことは、頭を鈍器で強くぶん殴られたかのような衝撃だった。

(ああ……そんな……ウソ……)

彫谷さんの美しい茶髪も、きめ細やかな肌も、ピンク色の唇も、澄んだ瞳も、その全てが灰色一色に染まり、一ミリも動こうとしなかった。

私も、アレと同じ状態になっている。視線は彫谷さんの目に釘付けされて、動かせない。

辛かった。命の輝きを失った彫谷さんの顔を見るのが。

後悔の念がおしよせる。私はとんでもないことをしてしまったのではないか。

あの彫谷さんを、石ころに変えてしまうなんて……。

(ちょっとちょっと。石ころはないでしょー)

(ふえっ！？ 彫谷さん！？ ……い、いつから起きてたの？)

(んー、最初から……ていうか、意識ずっと続いてんだけど、こんなもん？)

一緒に石化した時、意識の有無は人によって違った。魔力や魔法の耐性が低い人は意識がなくなり、石化中は完全な石像になってしまう。

どうやら彫谷さんは、意識も感覚も完全に据え置きみたい。

ホッと、安心できた。まずは一緒に石になれたこと。私と彫谷さんは、本当に友達同士だった。

次に、彫谷さんの意識があったこと。簡単に戻れるといっても、ほんの僅かな間であつても、私が彫谷さんという存在を消し去ってしまうだなんて、耐えられない。

(大丈夫？ 気持ち悪くない？)

(ん、平気。……いやー、だけどマジヤバいわ。ほんとに、まったく動けないじゃん、これー)

そう。そうなんだよ。動けないの。

私と彫谷さんは、一つながりの大きな石だ。私の手と、彫谷さんの手は、中身が切れ目なく繋がっているはずだ。

接着した太腿も。境界線は、どこにもない。

(そっかー。アタシと石田、同じ石から彫った、おんなじ彫刻なんだね)

静寂が部屋を支配した。壁に掛けられた時計の音だけが小さく響いている。

私も、彫谷さんも、体は微動だにしない。視線すら動かせない。私は彼女を、彼女は私を、ひたすらに見つめ続ける。

(あはは、にらめっこしてるみたい)

(だったら、永遠に決着しないよ)

罪悪感が薄れていく。私はニュートラルな気持ちで、石化した彫谷さんの顔を観察し、目に焼き付けることができた。

ただひたすらに、美しかった。

五月に彫谷さんが、石化した私に見惚れた理由が、今ならハッキリ理解できる。対象が自分だったから、客観的にとらえることができなかったんだ。

全てが同じ材質、色で表現されることによって、形……造形だけが純粹に浮き彫りになっている。鼻から顎にかけてのライン、唇、素敵な睫毛、瞳、眉……。

特に、髪の毛のウェーブは本当に美しかった。世界中どこを探しても、これほどの彫刻は絶対に見つけれないに違いない。

ずっとお互いに目を合わせていても、恥ずかしくなかった。

もう、私と彫谷さんは人間じゃないからだ。

ジッと私を見つめ、私が眺める彫谷さんは、神々しい芸術品だった。

(アタシ……アタシ、ほんと……アレになってんだね……)

やり取りできるのは表層的な思考だけ。それでも、彫谷さんが私と似たようなことを考えている、感じてくれているのがわかる。

(彫刻……あの超リアルな……すごい……石田の……同じ……んっ……)

思考が一つに溶けあっ……あれ？

(んっ……アタシがっ……ちょうこ……すご……ヤバッ……！)

あれれ？

(あっ、んんっ、アタシ……ダメッ……！ 動けな……んんんっ)

彫谷さんの様子がおかしい。

(ちょうこッ！ ……アタシ彫刻ッ……！！)

脳内（今、脳はないけど……）に響く彼女の声が、けたたましく、荒れ、色っぽくなってきた。

(ごごご、ゴメンっ！ 見ないでっ、あっ……)

いや、見るなって言われても……動けないし……。

(〜〜ッ！！)

(ええ……？)

石化から十五分後、彫谷さんのお母さんがほっぺにチュッとして、私たちは人間に戻った。

彫谷さんは動けるようになるや否や、耳まで熟したトマトのように真っ赤に染めて、猛烈な勢いで部屋から飛び出していった。

その後しばらく、彫谷さんは私を見るなり顔を真っ赤にして露骨に顔を逸らすようになった。

彫谷さんに避けられるのはショックだったけど、何が起こっていたのかおおよそ察してしまった私は、彼女を責めることも、グイグイいくこともできなかった。

告白してもらえたのは、冬休みの最中、年末。

ラインのやり取りで彼女が言うところによると、信じられないことに、彫谷さんはこの時……興奮した、というか、エクスタシーを感じていて……。

そんで、イってしまった、らしい。

1月

年が明け、学校が始まり、彫谷さんとまた会話できるようになった。

「あの事」には、リアルではお互い一言も触れず、なかったことにしていた。

三年生がすっかり校舎から姿を消したころ、白崎さんにデッサンモデルを依頼された。

私は快く承諾し、放課後美術室へ足を運んだ。

埃をかぶった胸像たち。以前なら、手足の欠損した彫刻を見ると、無意識に自分を重ね合わせて、怖がっていたっけ。

生理的嫌悪感は完全には消えないけど、昔ほど酷くはない。

何でかな。やっぱり、彫谷さんのおかげかな。

彼女の作品であり、石化した私の分身である「目ざめ」外部から客観的に眺められたことによって、「彫像化した私」を、彫刻にのせて分離できたのかもしれない。私は人間で、彫刻じゃないって、ハッキリと境界線を引けるようになったのかな。

美術室の中央には、既に等身大の石膏像が設置されていた。稚拙な出来。……あれ、感覚麻痺ってるかも。

白崎さんは、キスする男女をスケッチしたいのだと申し出た。

漫画の決めゴマらしい。白崎さん、ノマカブ描くんだ？

毎日のように下着姿で石化していたことを思えば、なんてことない。キスだって腐るほどやったし。……相手は一人だけど。

台座に上り、石膏像の背中に手をまわし、顔を接近させた。

うーん、顔のつくりが甘々だあ。目すらない。幸い口っぽい膨らみはある。

しかし、石膏像とキスだ。常人はまずやらない行為。いざやろうとすると、大分気恥ずかしいものがあつた。

白崎さんの的には、相手役の男を人間ではなくしたことで、よく配慮できたと思っているだろうけど。

「……ほ」

「え？ 何か言った？」

「い、いや、何でもない！」

彫谷さんが良かったなあ。……って、無意識に口をついて出てしまうところだった。危ない危ない。何考えてんの私。

その時、彫谷さんが美術室に入ってきた。石膏像に抱き着く私を見て、ポカンと呆けた顔を見せた。

白崎さんは悪びれずに事情を説明した。

「へえ、そうなんだ」

彫谷さんの声が少し震えていた。怒ってる？ それとも、ちょっとして、悲しんでる？

「あ一気にしないで。とっととやっちゃいなよ」

彫谷さんは口ではそう言うものの、表情に陰りがあった。

「早くー」

「うん……」

白崎さんに促され、私は石膏像とキスした。唇が触れ合う瞬間、チクリと胸が痛んだ。

(ごめんね、彫谷さん……)

どうして謝るの？

別に、彫谷さんとはキスしないって約束したわけでもないのに。

二分ほどすると、白崎さんがさらなる注文を出した。

「ごめーん、ちょっとゴーグル外してもらえるー？」

「え？」

「ほんのちょっと！　パパッと頭周り描くから！　……それなら、見ても石になんないでしょ？」

「うーん」

石膏像と目線が合っても、石化はしない。そうなんだけど……。

私は横目で彫谷さんを見た。便乗してデッサンしているけど、辛そうな表情をしていた。

「おねがーい」

白崎さんとは、年末コミケに同行してくれた恩もあるし……。私はゴーグルを外して、石膏像とキスするポーズをとった。

「サンキュー！　石田さんナイス！」

一瞬でも、誰かと目を合わせるわけにはいかない。だから、彫谷さんの様子はうかがい知れない。

胸がズキズキと痛む。どうして？　私が彫谷さんを裏切ったから？　悲しませちゃったから？

……何に対して裏切ったのよ。

……彫谷さんは、どうして、悲しんだの？

魂を持たない石膏像からは、こうして体を繋げていても、心の声は聞こえなかった。

その日、デッサンが終わるとすぐ、彫谷さんは私を引っ張って帰宅した。

明らかに機嫌が悪い。やっぱ怒ってる？

帰路の途中、彫谷さんは無言だった。私も罪悪感から、沈黙を打破る言葉をもてなかった。

私が、他の人とキスしたから……。って、人じゃないよ。

第一、何でこんなに後ろめたいの。別に私は……恋人、ってわけでもないんだから、誰とキスしようが自由じゃないの……。

でも、「誰か」の具体例は出てこない。やっぱり、私は彫谷さんと……。

彫谷さんの家にお邪魔して、部屋に二人きりになると、ようやく私は口を開けた。

「怒ってる？」

「うん」

「ご、ごめ」

「あっ、やめて。いーよ、謝んなくても。だって、アタシら、その……」

彫谷さんはうな垂れながら、弱弱しく言った。

こんな彫谷さん、初めてだ……。

言いたいことは痛いほどよくわかる。私も同じことを考えていたから。

私たちって何？ 友達？

単なる友達じゃ絶対じゃない。白崎さんも進藤くんも彫谷さんとは友達だ。でも、私は……
違うと思う。もっと違う何か。

特別な、何か。

親友？ 他人とキスしたら起こる親友って何？

彫谷さんが続けて重たい口を開いた。

「ねえ、もしアタシが……。逆だったら、石田はどう思う？ それだけ聞かせて」

もしも逆だったら？

彫谷さんが私じゃない石像とキスしているところを頭に思い描いた。

ヤダ。

そんなの見たくない。

彫谷さんがキスする石像は私だけがいいよ。

ううん、そもそも絶対ないもん。彫谷さんを魅了できる石像は、世界に私一人なんだから。

「……ヤダよ」

その答えを聞くと、彫谷さんはやっと笑ってくれた。

二人で両手を重ね、指を閉じ、顔を近づけた。

――邪魔だな。

右手を握り合ったまま、ゆっくりゴーグルに近づけた。私が目を閉じると、手の平は合わせたまま、彫谷さんが指だけ開いて、ゴーグルをグイッと取り上げた。

私と彫谷さんは、キスをした。人間同士では初めてのキスを。

舌が触れた。

刹那、私は目を開いた。

(あ……)

彫谷さんも、私と同じ。

パキン、と優しく乾いた音が木霊した。

私と彫谷さんは、キスしたまま一つながりの石塊と化した。

体がまったく動かない。互いに薄く目を開いたまま、互いの瞳を捉えあう。永遠に外れることはない。

——もっと、もっと奥に。

願い空しく、石化した舌はそれ以上 0.1 ミリたりとも動かなかった。

(んっ……はあっ……)

彫谷さんが興奮してる。私と一つになったことで。

彼女を焦がす熱が、思考と一緒に、私にも届けられた。

(！？ ……ッ！！)

激しい快感が、次第に波のように私の全身に広がっていく。こんなこと、今までなかった。

もしかして、いつもより深く繋がっているから？

私の両手は彫谷さんの手を握りしめたまま、ピクリともしない。唇も重ねあったまま離れることはできない。

もはや今の私に、この快樂に抗う手段は残されていなかった。

(んっ……んんっ……あっ、動けな……)

(えっへへへ……)

彫谷さんはちょっぴり得意気だ。ごめんね、変態だとか思っちゃって。天にも昇る心地だよ。

体をよじることも、声を出すこともできない石の身体には、この甘美な陶酔を逃がす場所がない。

身悶えしたい。声を張り上げたい。もっと深くつながりたい。

叶えられることのない強烈な欲求が、ますます私たちを揺さぶる。

——もっと、ずーっと、永遠に、彫谷さんと石像になりたい。

彫谷さんのお母さんに発見されるまで、私と彼女はずっと石化していた。

解除直後は、人生で最大に気まずい場面だった。お婆さんの顔ときたらもう……。

まあ自分の娘が友達の女の子とキスして石化してたら、大仰天だろうけど。

石化している間、体力が消耗することはない。はずなのに、なぜか私と彫谷さんははあはあと息を切らして、しばらく腰に力が入らなかった。

心地よい気だるさと充足感がしばし続き、私は彫谷さんが決死の言い逃れに打って出る間、ベッドに転がり夢心地だった。

最終的にはお婆さんの理解というか、諦念というか、呆れによって、私と彫谷さんは、たまーにキスしながら石化するようになった。

最もそのことについては、お互い一切口にはしない。学校やラインで改まって話題に出ることはないし、事前に今日やる？ これからやる？ みたいな会話もない。

彫谷家にお邪魔した時、三回に一回ぐらい、何となく雰囲気ですういう流れになる。

こうして、適切な表現が思いつかないけど、私と彫谷さんは誰より特別な関係になった。

2月

初めて、私は彫谷さんを自宅に招いた。彼女の家と比べると、狭くて散らかってて、何ともお粗末だ。

彫谷さんは一切馬鹿にしたりするような素振りは見せず、私の両親ともすぐに打ち解けていた。

私のアルバムを見せると、彫谷さんは

「きゃー、かわいい〜！」

と甲高く騒ぎつつ、大いに喜んでくれた。

小学校低学年の時の写真を見せていると、パソコンを覗き込んでいた彫谷さんが尋ねてきた。

「……石田って、静岡いたの？」

「うん、ちっちゃい時は。どうしたの？」

彫谷さんは私の顔を見て、何か考え込むように真剣な面持ちで目をつぶった。

「静岡県立美術館って、行ったことある？ 小さい時に」

「へ？ あーうん、どうだろ」

どうしていきなりそんなことを？

その美術館はどうかはわからないけど、私には小さいころ、この障害でえらい恐怖体験をしたことがある。

ちょうど、まだ静岡にいたころだ。確かどこかの美術館だったかなあ。

屋外に彫刻を展示しているところだったはず。

私はそこでウッカリ迷子になったあげく、石化してしまい、長時間、助けが来なかったのだ。

来観客は全員、私を彫刻だと思って無視するか、興味深げに眺めるか……。

その徹底した物扱いが、幼い私にとってどれだけ怖かったことか。一生このままなんじゃないか、永遠にこの美術館から出られないんじゃないか。

ここで彫刻として生きていくことになっちゃうんだ……って。

思い出すだけでお腹が痛くなってくる。

彫谷さんが質問を変えた。

「えーとじゃあさ、昔美術館で石化しちゃったことってある？」

「あー、そうだね、あるよ」

「マジ！？」

彫谷さんが大声を出したので、ビックリしてしまった。

え、え、何？ 何でそんな興奮してんの？

とりあえず私は、迷子石化の思い出話を聞かせた。すると彫谷さんがドンドン熱くなり、「どこ！？ やっぱり静岡県立！？」

とすごい剣幕で問いただしてきた。

「あ、あー、どどどうだろ。名前は覚えてないけど……。ていうか、なんでそんな熱くなってるの!？」

「あっ、ゴメン。……ありゃ、話したことなかったっけ。アタシが彫刻始めた理由」

「……いや。聞いたことないと思う」

「そっかー」

彫谷さんの彫刻談義は色々アトリエで一方的に垂れ流されてたけど、それはなかった…
…いやあったかな？ 覚えてない。

「アタシね、小さいころ……。小学校の二年の時だったかな。静岡にね、家族で旅行いったことあって」

「へー」

初耳。もしかして、小さいころどこかですれ違ったりしていたのかも。そう思うと、ちょっと嬉しくなった。

「アタシ、絵描くの大好きだったから、パパが美術館に連れて行ってってくれて。そこ、外に展示してるのがあったんだけど、その中に信じられないくらいリアルな彫刻があったの」

私の脳裏で、久しく失われていた記憶がフラッシュバックした。

「子供の彫刻……怯えた顔の。まるで生きてるみたいに精巧で、これまでに見たどんな絵よりも綺麗で……美しくってさ。アタシ、見惚れちゃったの。何だこれ、こりゃすごい、マジやべえ！ って」

「彫刻」になった私をジックリと観察した人たち……。大人、大人、大人……子供。

「あの作品、プレートもなかったし、パンフレットにも載ってなかったの。だからパパに頼んで、受付まで行って、あれは誰の何て言う作品ですかって聞いたんだけど、そんなもの収蔵品にないって……」

あの日、私を鑑賞した人たちの中に、誰か子供がいたのを思い出した。同い年ぐらいの…
…女の子。

「戻って見たら、もうその作品はなくなってたの。結局それっきりで、検索しても出てこないし、どの美術の本にも載ってないし……」

私だ。女の子が去った直後。両親が見つけてくれたんだっけ。

「あの幻の彫刻を、どうしてももう一度見たくって、見たくって……」

「自分で彫ろう、ってなったの？」

「そう」

彫谷さんが私の手を握りしめた。顔が輝いている。

「心当たり、ない？」

「多分、私、かな……」

彫谷さんが少しウルッと目をにじませた。

「見つけたよおお～!!」

「ちょっ、痛い痛い痛い！」

彼女は私の手を掴んだまま、激しく上下に腕を振った。

知らなかったし、気がつかなかった。まさか、彫谷さんが彫刻を始めた切欠が、私だったなんて……！

見たことないぐらいのハイテンションで、飛び上がらんばかりに喜ぶ彫谷さんを見ると、私も目頭が熱くなった。

私が、彫谷さんと、そんな昔から会えていたなんて。

どうして、お互いもっと早くこのことに気がつかなかったんだろう。

そしたら、もっと、もっともっと早く、彫谷さんと友達になれたのに。

お母さんに確認したら、私が迷子になって石化したのは、間違いなく静岡県立美術館だった。

彫谷さんは大変な喜びようだった。

「何これすごくない？ アレじゃん！ 運命じゃん！」

「ふふっ、そうだね」

「アタシね、ずっとね、あの彫刻に――石田に会いたくってね！」

「うんっ」

「ソウルメイトだね、アタシたち！」

心が踊る。私と彫谷さんが、小さいころに一度会っていたという、ただそれだけの事実が嬉しい。

私が、彫谷さんの人生に大きく関わっていた、ってことが幸せ。

「会いますか〜？」

私がゴーグルに手をかけると、彫谷さんが上からつかんだ。

「彫刻もいいけどー、今は……人間の石田にも会っていたいなー」

彫谷さんは素早くゴーグルを上をずらし、目を閉じて軽い口づけを行った。そして即、唇を離すとゴーグルを戻した。

一、二秒の早業だった。

私の顔は灰色ではなく、真っ赤に染まった。

「もー！」

3月

終業式を終え、私は帰る前に美術室に寄ってみた。

準備室の扉が半開きになっている。覗くと彫谷さんを見つけた。

「何してるの？」

「ん。これ見てて」

薄暗い美術準備室の奥に、先輩方の卒業制作が並べられていた。

そういえば……来年で私たちも高校卒業しちゃうのか。

急に、胸が締め付けられるような思いがした。

大嫌いだった学校が、こんなにも愛おしくなるなんて、一年前は思ってもみなかったなあ。

それも全部、彫谷さんと出会えたからだ。いいや、再開できたから、だね。

「そういえば彫谷さんって、卒業したらどこ行くの？」

「アタシ？ 美大いくつもり。受ければだけど」

ああそっかあ。そうだよな。じゃあ、卒業したらお別れなんだ……。

「石田は普通の大学いくんでしょ」

「うん……」

彫谷さんが私に近づいた。

「そんな悲しそうな声出さんでよ〜。大学違っても、別に友達じゃなくなるわけじゃないんだから」

「そ……そうだよな」

「ていうか、まだ一年残ってっし」

「あはは、だよな」

彫谷さんと同じでいられる最後の一年。悔いを残さないようにしたいな。

いっぱい話して、遊んで、そんでもって……。

「これ作る？」

彫谷さんは先輩美術部員たちが残した卒業制作を指さした。

「進級制作」

「ええっ、でも、ここで……？ ここ学校だよ……？」

「いーじゃん、誰も来ないよ」

「いや、来なかったら困るよ……ずっと……」

言い終わる前に、彫谷さんが私の手をつかんだ。

絶対ダメだって頭でわかっているけど、体は拒まなかった。目を閉じてゴーグルを脱ぎ捨て、手のひらを合わせ、指を閉じ、そっとキスをして、舌を絡ませた。

目をパチリと開けると、すぐに目と目がつながった。

他に誰もいない美術準備室の中で、私と彫谷さんは石像になった。

(あはー、やっちゃったね)

(もう……あは一じゃないでしょ)

誰かに見つけてもらえないと、ずーっとこのまま二人で石像になっているしかない。

でも誰かに見つかったら……私と彫谷さんは「そういう仲」なのだとバレてしまう。

(どっちかな?)

(んもう……すぐ誰か来るよ)

と言いつつ、心の奥底で、「誰も来なければいいな」という邪な願望が芽生えた。

そしたらずーっと、卒業することなく、私と彫谷さんは、一つでいられるのに。

体内から沸き起こる恍惚と、半開きの扉から流れ込む心地よい春の陽気が、私たちを祝福した。

